
Pray 4 my sister !

ドミノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Pray 4 my sister !

【Nコード】

N1890Y

【作者名】

ドミノ

【あらすじ】

いつのまにか転生していた男が元の世界の妹を幸福するために迷宮に挑む話。この主人公には最初から恋人が付いています。この小説はarcadia様の方にも投稿しています。

第一話（前書き）

できるだけ完成度の高い作品を目指しているので誤字脱字の指摘や批判も含めて作品の感想をいただけたら嬉しいです。

第一話

(どうか、遠く離れた場所にいるであろう妹が幸せでありますように)

そこは教会だった。

外見も中身の装飾も必要最低限に抑えてあり、質実剛健と言うよりはかろうじて貧乏臭さがでないといった風情だが、同時にそこには手入れをしている人間の性格と思いやりを表してるかのように見る人に安らぎと癒しを与える場所でもあった。

礼拝堂の最奥中央にはステンドグラスがはめられており、そこから色のついた光が降り注いで礼拝堂内を明るく照らしていた。

ステンドグラスは左上に太陽のような無色の丸い円があり、右下側にはそれに向かって頭をたれて祈りを捧げる女性が描かれている。これは、人に光と祝福と試練の地を与えたと伝えられている光神こうしんとこの世界を形作る原因をつくった聖女を描いてると言われている。

そんな靈験あらたかな硝子絵の前にひざまずいて祈りを捧げている人間がいた。

性別は男性。歳の頃は15ほど。髪の色は黒。

背はおよそ成人男性の平均と指1、2本分と変わらない。(およそ170センチメートル)

体つきは一見細長く見え身長に対し肩幅が少し足りない、その分手足は長く感じられる。肉付きは見る人にしなやかさを思わせる筋肉のつき方をしており、このまま順調に成長すればまさに理想と

も言える肉体に進化するであろうことがうかがえた。

そんなまるで神に愛されたような肉体を持つ人物の顔立ちと言えは……。

まだ成長期の最中であるせいか幼い柔らかさと青年の持つ精悍さが同居しているような顔だった。

顔のパーツのそれぞれを見て取ると、キリツと結ばれた眉。額がらくつきりとした線を描く鼻。健康的な色合いの唇。日焼けをしてない色白の肌。

目を閉じ、胸の前で手を組んで祈る少年。

服装はゲインズボロ（白に限りなく近い灰色）の縦縞のアクセントのはいつた背広だった。

（どうか、遠く離れた場所にいるであろう妹が幸せでありますように）

毎日変わらず心のなかで吐いている文句を唱えて祈り続ける。

誰かが来たのか、扉がきしむ音が響いた。

そこにいたのは神父服を着ている男性だった。

「迎えが来ましたよ。ヨシア」

「はい」

少年、ヨシアが閉じていた目を開ける。傍目からは見目のよい少年には見えないヨシアだが、その印象を大きく変える欠点とも言うべき点があった。

目。目だ。瞳に光を灯さない死人の目。ただの無機物のガラス細

工のような鳶色の虹彩、感情という光を一切反射しない黒々とした瞳。

生きることや希望、楽しいこと嬉しいことを全てドブに捨てて腐敗させたような死んだ目をしている少年だった。

立ち上がり、神父の元へと歩いて行くヨシア。中心線が一切ぶれずに歩いている姿からは彼が常に体を鍛えていることがうかがえる。くるりと体を反転させヨシアを先導する形で歩き始める神父。二人は無言で歩いて行く。神父の影響を受けたのか拾われた時からそうだったのか二人はあまり口数の多い人種ではなかった。

同時にわざわざ口を開かねば心を交わせないような人種でもなかった。二人ともどちらかと言えば行動で自分の意志を示す事を好んでいた。

外に出る二人。外は曇っていたが、湿気はないから雨の気配はない。外の門からは4輪クワッド・リベタルス魔導車のリアフロントが見える。

また、付近には一人の女性が立っていた。銀髪をポニーテールにまとめた赤目の女性。

顔立ちは伶俐れいりであり切れ長の目が抜き身の刀のような鋭さを持っていた。

常日頃気の抜けない迷宮に潜り続けてる人物特有の癖、常在戦場とも言うべき精神の在り方。どこにいても臨戦体勢であり続ける戦闘者としての本能。それが顕著に現れていた。にも関わらず、女性はいっさいの美貌を損なっていなかった。むしろその雰囲気により一級の武器が持つような機能美を持つにいたったと言い換えても

いいかもしれない。藍色の背広とタイトスカートの上下に黒革のパンツ。

ピンと伸びた背筋、こぼれんばかりのおおきなバスト、締められた体幹、引き締めまりつつも柔らかさを残した筋肉、腰から太ももにかけての絶妙なライン、それらすべてが調和し一つの美の頂点を作り上げていた。女性、レーティア・サント・ニエリアを。

神父とヨシアは無言のままレーティアの元へ歩いて行く。

「ヨシア」

「はい」

神父はヨシアに背を向けたまま言葉をかける。

「その……体に気をつけて、頑張りなさい。」

言葉を通して意志を伝えるのは苦手とは言え、いくら何でもこれはない。旅立ちを送る言葉としてはいささか質素すぎるのではと、気の利いた事を言えない現実を神父は恥じた。それでもヨシアには言いたいことは伝わったのか。

「はい、頑張ります」

と、だけ短く答えた。口下手な神父のこと。自分の育て親の気持ちなどすぐにわかる。伊達に15年寝食を共にしてきたわけではない。

レーティアの前までたどり着いた二人。ヨシアはそのまま神父を
通り越しレーティアの隣まで歩いて行き、体を彼女の方へ向け、頭
を下げた。

「これから、よろしくおねがいします」

「ああ、こちらこそよろしく」

これから師弟関係になるはずの人物にお互い簡素すぎるやりとり。
だが、師・レーティアは口数の少なくおとなしいヨシアだからこ
そ弟子にしたのであり、弟子・ヨシアも自身と似て言葉を余り用い
ない静かな人だからこそ師弟関係を申し込んだ。 お互い似たもの
として性質は把握しているし、それ以上にもっと深いところであ
がつていると二人とも信じていた。今はただの師弟だが。

「レーティアさん、息子を、ヨシアをよろしくおねがいします」

「はい、光神様に誓って」

一礼してレーティアに挨拶を済ませたヨシアの代わりに今度は神
父が頭を下げた。

対して彼女は这个世界で最上級の誓いとして使用される言葉をも
って返答した。この世界で光神の名前はそれ程に重い。

頭をあげてヨシアを真正面から見つめる神父。その目には10年
間息子の成長を見守ってきた優しい光が宿っていた。

「今生の別れではありませんが……いつてらっしゃい」

「はい、いつてきます。父さん」

お互い似たもの同士。最後まで短いやりとりで別れを済ませます。

「じゃあ、行くうか」

「はい」

そう言っつて車に乗り込むレーティアとヨシア。4輪クアッド・リベタルス魔導車の右側の助手席に座った彼からはミラーから神父の姿を見ていた。教会は街の中央通りよりすこし外れた場所に建っており、人の通りはそれほどない。

(15年……長かったのか、短かったのか……)

この街ではヨシアは灰色の生活を送っていた。一見すると前とほとんど変わりのない世界、優しい育て親、二度目の学校生活、ぬるま湯のような居心地良くそして退屈な日々。

このまま風化していくように歳を取って、そして死んでいくと思っていた。

この世界に漂着した自分という自我は特に意味も無く、何も成し得ずただ寿命を消費していくだけと想っていた。

だがかつての世界との差異。それがヨシアの人生の道先を決めた。

(せじゆんしゃ修練者、まいきう迷宮を踏破し神の高御座たかみくらに至り願いを叶えることができるといふ現存する奇跡の一つ。俺もそこに到達できれば……)

かつての世界を思う。魔法や奇跡など神話やお伽話でしか存在しなかった世界。

だが、今は違う。魔法や奇跡はこの世界では存在し、人々の生活を形作る一因として存在している。それがいいことなのか悪いことなのかヨシアには判断がつかない。それでも。

(かつての世界に戻りたいとは言わない。俺は自分が死ぬところを自覚した。
死者は死者であるべきだ。二度目なんてイレギュラーがあるだけで十分すぎる。

ただ……それでも奇跡があるというなら、あちらに残した妹の幸福ぐらいは祈ってもバチは当たらないはずだ。だから……俺は……)

「出発するよ」

声に意識を戻される。15年間過ごしてきた場所との別れ。新たな出発。

「はい」

それを自覚し、声に出す。未だ始まりの奇跡から二度目の到達者は出ていない。

それでも、と思う。

隣にいる彼女の元でなら……聖女の再来とまで言われているレーティア・サント・ニエリアの元でならと期待してしまう。

クアッド・リベタルス

4輪魔導車の魔導炉が動き出す。ミラーに神父を写したまま車は前に進み始める。ゆるゆると道を走って行き曲がり角に入るその直前、ほとんど指先サイズの神父の目から光がこぼれ落ちたような気がした。

(やっぱり、気にしてるのかな)

15年間育てた義息子。それがこの世界で死亡率一位の仕事に就

くとなるとやっぱり送り出す側は不安なんだろうか。やめて欲しいと願うのだろうか。

(こんな死んだ目をしてるような人間の世話してくれたし、やっぱり父さんは優しいな)

どこか他人ごとのように考えるヨシア。生意気な目をしてる、と面倒事に巻き込まれたりもしたし、この目のせいで友人は少ない。彼女にいたっては一度目と二度目をあわせても40年間できた試しがない。

連続して唸り続ける魔導炉の音と振動を受けながらぼーっとしていると隣から声がかかった。

安定してスピードを出し始めた車はそろそろ街を抜け郊外の道路に出ようとするとそこらだった。

「ヨシア」

差し出される右手。運転中は危険だから遠慮したいと一瞬考えるが

(この人に限ってそんなことは無いか)

すぐに取り消す。人類最高峰の実力。こんなものはわざわざ集中する必要さえ無いとばかりに態度で示し続ける恋人の右手に自分の左手を重ねる。

「ん」

満足そうに目尻をやわらげ、うなづくレーティア。

(他人の体温がこんなにも心地いいとは知らなかったな……)

こんな思考はもうバカップルと呼ばれるものなんだろうかとくだらない疑問を感じつつ振り返る。

レーティアと知り合うことができ、さらに師弟関係まで結べたのは人生の中でもっとも幸運な出来事の一つだろう。

そして自分が予想もしなかったもうひとつの関係を結ぶことが対価とは思わなかったが……

(恋人になれ……ねえ)

相変わらず当時の事は未だ持つて謎が多い。確かに自分の顔は一度目の時より見てくれはいい。

だがそれも多少心持ち修正をかけましたといえるような誤差だったし、なによりレーティアは外見で恋人を選ぶような人間ではないと感じていた。

自分もそうだし神父もそうだった。基本無口な人種は他人全てがどうでもいいと感じてる面は少なからずある。

だからこそ、誰かを重視するのではなく、誰かの起こした行動に重きを置く。

ましてや彼女は選ぶ側だ。富も名声も権力も財も成そうと思えばいくらでも成せる能力を持っている。

そんな人間が自分に何を見出したのか……それはわからない、けれど。

(逆にわざわざ無碍にするようなことでもなかったしなあ。俺で良ければいくらでもって感じだったし)

求められたら応える。損得、感情、理由それらがなくても応えるのは悪いことなのだろうか？

ヨシアにはわからない。たとえ自分であれば恋人の代わりに魔法の実験台にされようと拷問の練習台にされようとなんでもよかつた。ましてや二度目の人生というのがそれに拍車をかけていた。

自分目標が無く、自分に意味が無いと信じていたからこそその思考と帰結。

それでも。

(求められてる間は頑張って生きるか……初めてできた恋人だし……)

左手に感じるぬくもり。それを感じながら、シートに深く体を沈めた。

向かう土地は始まりの試練の地。修練者の聖地。 迷宮都市プロミ

ツサ・テラ

(お……晴れてきた)

空はまるで誰かの願いが叶ったかのように晴れてきた。

(旅立ちが絶頂期というのは、逆に言ってしまうえば落ちるしか無いということだけど……今日ぐらいは祝福してくれよ……光神様……)

迷宮はそれ自体が試練だ。 中では魔物が湧き出しそれに打ち勝たねばならない。

そうすることが信仰の形であると定められている。

そして試練である魔物に打ち勝ち、その亡骸を燃料にしてはじめて魔導の恩恵を受けられる。

それが光神が人類に与えた理。^{システム}人は迷宮に潜り信仰を捧げ、神は試練に打ち勝った人間に恩恵を与える。

聖女が望んだ神と人の関係をもつてこの世界の人類は文明を築きあげた。これからも、そうなのだろう。

故に修練者。自分の願いを叶えるため神の出した試練に挑み、死に、祈りを捧げる人柱。

それになることをヨシアは望んだ。もし、迷宮を踏破できても叶えられるかわからない願いを持って。

（どうか、遠く離れた場所にいるであろう妹が幸せでありますように）

かつての世界で残してきた心残り恋人。それだけが今のヨシアの原動力だった。

第一話（後書き）

正 2011/11/03 段落明け、目の情報の初出位置修正、単位修

第二話

丸2日。それが移動に費やした時間だった。途中で休憩は一度だけはさみ、それ以外は全て運転に費やして目的地プロミッサ・テラにたどり着いた。

大陸鉄道は開通したばかりで乗車賃もまだ高い。

何よりレーティアは人が大勢いる場所に行く事が余り好きではない。事前に弟子に通達しておいた方法通り、約48時間全てをアウトバーン（制限速度なし、要特殊免許）での運転で消費し、予定通りの時間に到着した。

途中休憩を挟む時以外片方の手をハンドルからはなし、平均時速160キロメートルを出しながら鼻歌交じりでの結果だった。

相変わらず修練者のスペックと集中力はすごいなあと思シアは思った。自分の師匠は世界一だと信じて疑わないと思シアもさすがにこの程度なら修練者の誰でもできるのだろうか？自分も果たして出来るようになるのか疑問に感じた。

（まあ、どうでもいいか。俺もそこまで出来るようには最低限なりたいけど）

やはりどこか他人ごとのように思案すると思シア。すでに一度の休憩だけで無茶な強行軍についていけるだけのスペックは整えてある。それでもただの鍛えただけの人間と修練者では絶対とも言える壁が存在する。

今はまだはつきりと感じていないが、それがこの世界の常識だ。荒野に最低限の道路設備が敷いてあるだけのアウトバーンその風景が高速で前から後ろへと一瞬で流れていく。

視界に変化があった。巨大な物体がフロントガラスを通して視界に入ってきた。

それは日の出のようにゆっくりとゆっくりと視界の下から登ってきて完全に登り切るまで2分ほど時間がかかった。

壁だ。遠くからでは横に広がり地平線の上に存在する異物にしか見えない。

だがアウトバーンで今現在も高速で距離を縮めているにもかかわらず、ゆっくりとしか動きを見せないのはそれだけで巨大さの証明になる。

もし、この都市を鳥瞰することができたなら外壁が正三角形を二つ組み合わせたような六芒星を描いていることが分かるだろう。

(おー、すげえ。ここからだと残り10分ぐらいか?)

自身の夢を叶えるかもしれない舞台との距離が近づいても、心の距離はどこか壁一枚を挟んでるような思考だった。

目はあいかわらす光を反射しない死人の目のままだった。

……そうしてまんじりと魔導炉の唸りと振動に身を任せてぴったり10分ほどたつてようやく城壁、いや大城壁の影のなかに侵入した。

城壁からいくらか距離をおいた場所にアウトバーンとの合流道路があり、誘導に従って車が城壁の方へと鼻先を向ける。今まで感じていたスピードの分だけ感覚が麻痺しているせいかなり速度を落としてから城壁に近づいていくように感じた。

検問所に到着して一旦車が停止する。白線の通りに検問所の真横、窓口にぴったりと車を寄せた。

「写真付きの身分証明書となるものを提出願います」

人当たりのいい顔立ちの男性の声に従って、座席下からカバンを引きずり出しそこから書類を挟んだままのパスポートを無言で職員に提出するレーティア。

この都市では入植や修練者希望の人間のため入国、というか都市に所属することは簡単にできる。

修練者になると神に立てる誓約により、一部の行動が制限されてしまうがそれをあまり気にする人間はいない。

パスポートに挟んである書類はヨシアの保護責任者にレーティアが就くという旨が書いてあり、プロミツサ・テラの外で生まれたヨシアのパスポート代わりだった。

「はい確認させて頂きます。……レーティア・サント・ニエリア様、ヨシア・アンザス様。確認が出来ました。お帰りなさいませ、そしてようこそプロミツサ・テラへ」

パスポートと書類を受け取り、カバンの中に戻し、そのカバンを座席下に押し込んで、ハンドルを握るレーティア。車が発進して、城壁の中を通って行く。

真つ暗なトンネルを20秒ほどで通り抜けた先は森だった。

人の手が入り中を通るように道路や通路が敷いてあるからどちらかと言えば森林公園といった方が近いかもしれない。

最大で城壁の3/4ほどまで伸びた巨大な木々が生い茂る美しい森。プロミツサ・テラの南側に配置され日の光が差し込むよう設計された人工的な森だ。

その森を抜けてやっと街の郊外に出る。広大な畑や柵で区切られた牧場などが見られるのどかな風景。遠くの畑ではトラクターのよ
うな機械を使って畑仕事に勤しむ人間がちらほらと見えた。

道路に沿って街へとそのまま進む。

自然あふれる風景からだんだんと人工物の屋敷やサイロが増えてくる。

そしてその土地が売られている事を示す看板が一気に増えてきて
やっと人の生活圏に入ってきた実感を得る。

道を曲がりながら南から中央へと向かう。ここに来てやっと無口
な師弟が久々に会話する。

「師匠」

「なに」

「案外普通なんですネプロミッサ・テラって」

「迷宮がある以外は普通の都市だよ……ああ、あと、せいぜい魔物の
亡骸を入れる魔石塚が家の近くにある」

「へえ、異臭とか大丈夫なんですか？」

「最低一日日光当ててれば魔石になるらしいし、普段迷宮に潜って

るからわかんない」
「そうなんですか」
「うん」

前を向いたままお互い言葉を交わす。トンネルを抜ける前から再び手を繋いでいる二人。

「あ、あと」

「なに？」

「今午前ですけどこのあとの予定ってどうするんですか？ 3日後の測定までのスケジュールでもいいですけど」

「昼食までは休んで、午後には君に必要な買い物と荷解き、夜から3日後の測定までは……」

言葉を止めるレイティア。なぜかだんだんと頬からその上が顔が赤くなってきた。

不思議に思いつつも続きを聞いてみるヨシア。

「までは？」

「……か、あん……いき……」

「？ 今なんて？」

背筋を伸ばし前だけを見ているのに赤面し、ぼそぼそと喋るレイティア。

切れ長のキリツとした目を更に鋭くさせ前を睨んでいる。その絵はどこかシニールだが、はっきりと喋るまで耳を傾ける。

「……貫通式……」

「何言ってるんだあんた」

聞こえた瞬間思わず真顔で反射的に答えるヨシア。

「3日後まで爛れた日常を過ごす！ これは決定したの！ 弟子は師匠の言うこと聞きなさい！」

「いや、逆切れされても……。いや、いいんだけどさ、もっとこうプラトニクな部分とか必要ないの？ 普通デートとかやってからじゃないの？ その段階に行くのは。あと左手痛い」

顔を限界まで赤くしプルプル震えているレーティア、今までは手加減していたのだから切れた時に力を入れてしまった右手はヨシアの左手をぎりぎり締め付ける。

あと少して複雑骨折して皮膚がちぎれ中身がでてしまいそうだ。

「さっ先に済みます！ その後にデートとかあ、あーんとかどっちもやる！」

「いや、それはそれでいいけどさ……。あと、左手超痛い」

興奮して口角泡を飛ばすレーティア。前をキツと見つめているがどちらかといえば初めてできた恋人の方を恥ずかしくて向けないといった様子だ。運転中によそを向くとかおかしい話だが。

「いいんなら師匠のい、言うとおりにしなさい！」

「はいはい、恋人ティアの言うとおりにしますよ」

「~~~~ッ！」

うつむき始めるレーティア。それを見て焦るヨシア。

「ちょ、ちょっとレーティアさん！？ 運転中なんだから前向いて前！ あと左手凄く痛い！」

「み！ 道は！ か、体が覚えているからあつ、安心し…………て…………」

俯きつつも軽快にハンドルを切るレーティア。

「いや、始めてきた街でそんな曲芸やらなくても！ 怖い怖い怖いってば！ あと、左手死ぬほど痛い！！」

今度はこっちが興奮して口角泡を飛ばすヨシア。それに対しレーティアは

(え、えへへ……テイ、ティアって、ティアって呼んでくれた……！
ふ、ふふふふふふ！ そ、そうだ！ 今日を記念日にしよう！
こ、恋人呼び記念日と、シンプルに恋人記念日その一どっちがいかな！？)

どこか頭のネジが外れた思考をしていた。

「ね！ ねえ！？」

「な！ なに！？」

「どっち！？」

「なにが！？」

訳のわからないやり取りをしつつも嘘は言っていなかったらしく道を間違えることなく、城壁内側、中央区のレーティアの買った屋敷まですいすいと車は軽快に進んでいった。

……ヨシアの精神をガリガリと削りながら、だったが。

……左手が治癒魔導でどうにかなる範囲で被害が収まったのは彼にとって幸運だったのだろう。

街の中央区から少し西によったあたりにレーティアの屋敷は存在していた。塀と屋敷を囲むように植えられた木々は街の喧騒を遠ざける効果を持つ。

そんな静謐な空気を持つ空間のなかにその屋敷は建っていた。

全体を白でまとめた屋敷だった。数は少ないがはつきりと存在感を主張している装飾は荘厳さを与え、計算されつくした配置の窓や白い壁はそれだけで芸術性を高めている。

そんな白い屋敷の駐車場区画の一画に車を止め、その車の中にまだ二人はいた。

「ハア、ハア……こ、怖かった……！　ちょっと師匠！　もうあんなことはしないでくださいよ!?」

「ご、ごめんつてば。そ、そんなに怒らないでよ……」

結局屋敷の駐車場の中に入ってバックで車を停めるまでレーティアはにやけてうつむいたままだった。

自分の体が止まってからやっと意識を取り戻し、恋人の怒った顔を拝むハメになったがまったくの自業自得だった。

荷物を取り、外に出る二人。

「んー！　長かった!」

ボキボキと体中の骨を鳴らしながらストレッチをするヨシア。二度目の人生とだけあって薄い灰色の背広がよく似合っている。

ただ、屋敷を眺めている目は相変わらず死んだままだったが。

「少し休憩してから食べる?」

藍色の背広とタイトスカートを着こなすレーティアは疲れを全く

見せずにヨシアに尋ねた。

「んー、それじゃあなるべく買物に合わせて地理を把握したいのでこのまま食べに行きたいです」

「わかった。ついてきて」

「はい、師匠」

そういつて車に鍵をかけ、玄関の方へ歩いて行くレーティアそれについていくヨシア。

なるべく他人の前では恋人であることを明かさない。

これがヨシアにお願いした内容の一つだった。

これは師弟としての関係と恋人としての関係のけじめをはっきりつけることが目的だとヨシアは思っていた。

迷宮ではたやすく命が失われる。迷宮内にしか存在しない魔物と常に相対する職業では当たり前のことだ。

たとえ恋人としての関係性や信用を得ても迷宮内で信頼できる存在になれるわけではない。

文字通り命をかけるにふさわしい存在になるにはそれ相応の戦闘能力や経験を必要とされる。そのパートナーという関係にまだ自分まだ成れていない。

そう自戒し、意識をはっきりとさせレーティアのあとを追いかけるヨシア。

……事実としてはお願いした本人が恥ずかしがってるだけだったが。

ヨシアが自分の実力に自信をつけたと判断しこのことに触れ、真意を聞き出すにはまだ時間がかかるがそれはまた別の話。

重厚な造りの扉を開けて中に入る二人。まず目に入るのは同じ木製として玄関扉と似た趣のある手すりと階段。

大理石とはいかないまでも特殊な白くつるつるとした石床、ところどころ黒い石材に変わってありポイントやラインを描いている。

本人があまり興味ないのか調度品やその類はほとんど存在しない。屋敷の中の空間の彩りは柱や壁にくっついていている装飾が担っていた。精緻でありながらあまり自己主張をしない装飾と共に視界の大部分を埋めるのはホワイトスモークの壁紙。

それは限りなく白に近い灰色であり、白系統であるが単純な白ではないそれは窓から入る日光をキラキラと反射しないのがこれを選んだ人間のセンスを表していた。

中にいる人間が少ないのかただ広いのか無音が支配しているそこは人が寝食をする空間よりは美術館や博物館といった風情だ。

（おおー、すげえ、カッコイイ？ 風情のある？ 上品な？ 色っぽい？

いや、とにかく上等な屋敷だな……。師匠はここに住んでてそしてこれから俺も住む場所か……。

特に俺のスイツと同じく白系統でホワイトスモークの壁紙ってところがカッコイイな。俺の好きな色のうちの一つだし。

この屋敷を手入れしてる人間ってどんな人なんだろ。師匠が雇うくらいだから有能なんだろうけど……。)

そんな白い屋敷の主は

「シーナ」

とだけ、短く、まるで目の前に人がいるかのように虚空に呼びかけた。

女性的な柔らかさと凜とした心地良い冷たさのある声が屋敷に響く。

いくらか時間を置いてから、はい、という鈴のようなキンと高い声の返事と共に現れたのはメイド服を着た少女だった。

「おかえりなさいませレーティアさま。それといらっしやいませヨシアさま。このやしきと、レーティアさまのざいさんかんりをたんとうしているシーナといいます」

どこか舌つ足らずな調子で、どうかおみしりおきを、と締めくくって一礼するシーナ。

身長はおよそ120センチ。流れるような肩甲骨までの金の長髪。耳が横にピヨコンと飛び出て鋭い角度を描いていることから亜人であることがうかがえる。

目は透き通るような青。顔立ちは一流の職人が丁寧に作り上げた傷一つ無いビスクドールのような顔だった。

薄く、軽いちいさな羽毛がのっかっているかのような眉。くりりとした純粹な眼差し、すこし眠たげなように眼尻が垂れている。

穏やかな曲線を描く鼻筋に、ふっくらとした頬。ありていに言うて人形が動いてるかのような美しい亜人だった。

(エルフ……かな?)

初めて見るエルフ耳のメイド服を着た少女にも感情を一切見せず正面から死んだ目で見つめるヨシア。

見た目で人を判断するのは良くないことだ。よく『目が死んでる』と評されるヨシアだからこそ、人一倍そういうことを気にする。だが好奇心には勝てなかった。

「失礼ですが、お年を聞かせてもらってもかまいませんか？」

「はい、ことしで48になります」

「シーナ、昼食取りたいんだけど」

「では、にもつをこちらへ、さきにしょくどうでおまちになってください」
「ん」

レーティアからカバンを預かり屋敷の二階へと上がっていくシーナ。

誰も喋らなくなったエントランスでヨシアが口を開く。

「師匠」

「なに？」

「エルフって人の何倍生きるんですっけ？」

「約八倍。あの子は人間の寿命換算で5・1歳」

「エルフの成人って何歳からでしたっけ？」

「30歳。前は旅館の女中でおじいちゃんおばあちゃんに大人気だったらしいよ。」

ただ、お小遣いを押し付けられるのが心苦しくなったとかでうちに来た。

「じゃ、食堂行こ」

「はあ」

寿命が長いからといって精神の成熟にまで時間がかかるといったことではないらしい。

やっぱりこの世界は前とかなり違うなあと考えるヨシアだった。

第二話（後書き）

2011/1103 段落空け修正
2011/1105 修正、一部追加

第三話

食堂で昼食を取ったあと、隣接するリビングで休んでいる二人。二人の前にはそれぞれ湯気の立つティーカップが置かれてある。入れたのはレーティアの後ろに立っているシーナだ。ゴールドンルールにしっかりと則って淹れられたその紅茶は豊かな香りを出し、淹れた人間の實力をはっきりと自慢していた。

「チキンソテーと白パンに温野菜のサラダ。全部美味しかったです。お茶もすごくおいしいですし、ごちそうさまでした、シーナさん」
「はい、おほめいただいてうれしいです」
「ん、シーナは何でもできるから。じゃ、買い物に行こ」
「はい師匠」

お茶を飲み干し、そう言って立ち上がる二人。マイペースに歩き出すレーティアとそれに続くヨシアとしシーナ。
玄関口までたどり着き、シーナが頭を垂れた。

「いつてらっしゃいませ」
「ん」
「いつてきます」

車に乗り込み、シートベルトをつける二人。

「どこを回っていくんですか？」
「中央区の行きつけのデパートで生活用品と服関係買って、北区にある契約してる工房で君の体のサイズの測ってもらっつ。」
「はい。今までの荷物は一応届いてるんですよね？ ほとんどは服ぐらいで開けておいても構わないものばかりだったんですけど」

「君の部屋はほとんど出来上がってるね。服は洗ってから箆笥にしまったってシーナ言ってたし、本も机の上のついたてで十分なくらいだったから。どこか行きたいところある？」

「いえ、特に」

「そう」

そう会話を終えたと同時に車がゆっくりと動き出した。

基本的にプロミッサ・テラのどこかへ行かないとものが買えないとかそういったことはあまりない。

都市の規模が大きいのだ。衣食住すべてをどこでもまかなうことができるが、昔の時代の名残りとしてそれぞれの方角には長い年月を誇る名店や伝統ある牧場などが存在していた。

そして、それ故にそれぞれの区独自の特色を持ち、プロミッサ・テラを支える柱となっていた。

上級の修練者や高給取りが住み、一流の店や都市運営を行うビルが集まる中央区。

日の出と共に喧騒に包まれ朝市が開かれる西区。

武器職人や服職人、工房をもつ魔導研究者の集まる北区。

酒場や娼館が集まり、夕方から夜にかけて活気づく東区。

畑や牧場、森林公園が多い自然あふれる南区。

本来であればこれら全てを見て回って紹介したいと思っていたらしいティアだったが、我慢をする。

なにせ今日の夜にはメインイベントが存在しているのだ。自分とはもかく相手の体力は温存させたい。

にやけそうになる頬を抑えつつ今度はしっかりと前を向きハンド

ルを握るレーティア。
夜まではまだ、長い。

そうして大型駐車場を備えるデパート、ヤ・アリクイドに到着した二人は最上階から地下に至るまでひと通り目を通し必要なものを買っていった。

歯ブラシ、コップ、下着、運動用のジャージ、寝間着、といった日常に必要なものから、そうでないものまでレーティアはカードの一括払いでバンバンと買っていった。

そうして再び車の中に戻ってくる二人。

「代金ありがとうございます。師匠。いつか出世払いで必ず払います」

「気にしないで」

貯めていた小遣いを使って支払うといったのだが、カード使ったほうが楽だからと押し切ったレーティア。

自分のモノだというのに自分で買うことができないことに不甲斐なさとし訳なさを感じてしまうヨシア。

それでも、全く言葉通りに気にしてないといった風のレーティアだった。

(なるべく早く自立して師匠の隣にしっかりと、後ろ髪をひかれることなく立ちたいな……)

自分の未来絵図を夢想し、それに近づこうと新たに決意を固めるヨシアと

（恋人にプレゼントするのがこんなに嬉しく思えるなんて気づくの遅すぎだよ私！

ああ、出来るならこのまま経済的にも依存させる状況って長く続かないかなあ。

いつか、結婚して財布がひとつになってもずっと彼の分は私のお金で払いたいなあ。

でも、なんか気にしてるし無理かなあ……。ホント気にしなくてもいいのに。いざとなったら養ってあげるのに……。）

恋人に頼られてることを嬉しがり、行き過ぎた思考をしてるレィティア。内心ではとんでもない事を考えてる女だった。

「出発するよ」

「はい、師匠」

それでも、内面を全くうかがわせない無表情なところが似たもの師弟だった。

晴れ渡る空に高層ビルが突き刺さる。透き通った空気を通して燦々と日光が差し込み、ビルのガラスがキラキラと輝く。

大都市では空気が汚れてしまいほとんど前の世界の生活では見ら

れなかつた太陽が自己主張をしている。

東京の23区から少し西に外れたところに住んでいた記憶のあるヨシアは懐かしみながら外を見た。

一部の歴史ある建物を除いて、ほとんど前の世界のビル街のようだ。

行ったことはないけどニューヨークみたいだとヨシアは感じた。

前の世界に比べて空気が綺麗なおかげで天気はしっかりと変化を見せるのがこの世界の好きなところだとヨシアは感じている。

汚れていない澄み切った風が吹く。石油や石炭などの前の世界で一般に使われていた資源はこの世界でも使われている。

ただし、世に出る製品のほとんどは魔石を加工したものを機構として含み、ほとんどが魔導製品としての面をもつのがこの世界の特徴だった。

そのおかげで環境破壊は抑えられているし、自然のサイクルのなかに入る程度の規模である。

それでもやはり、文明が発達するにつれて自然破壊が行われているという主張をこの世界で過去に聞いたときには笑いそうになった記憶がある。

前の資本主義経済の結果を思えば可愛いものだ。

様々な主義主張や正義が横行し、誰も彼もが争っていたかつてに比べればよほど自製のきいた人類。

おまけに魔導なんて技術のおかげで文明は前と遜色ないほどに発達している。

常に血を流し、誰かと争い競いあって文明を築いた前の世界。

光神と聖女により世界のルールとして誰かと殺しあいができないこの世界。

はたしてどちらが良い世界なのかはすでにわかりきっている。

それでも。それでも胸の中に苦いものが広がり、寂しさを覚えてしまうのは

(残してきたものがあまりにも大きかったからか……。)

前の世界に残してきた妹を思う。自分とは似ず、美しく、聡明でなにより完璧だった妹。

(あれには最後まで勝てなかったな……。最期が最期だったし、なにも与えてやれなかった……。だから、どうか……。)

どうか、遠く離れた場所にいるであろう妹が幸せでありますように
そう、祈った。

「ついたよ」

「はい」

声に意識を引き戻される。

意識をどこかに飛ばしていても呼ばれたらすぐに反射的に答えることができるのは前世から持ち越したヨシアの特技だ。

これのせいで返事だけはいつもいい、と先輩にいじられていたな
と思いついていた。

ついた場所は北区の限りなく西側に近い場所だった。駐車場は店の前の少ないスペースで2、3台しか車を止められない。

日当たりの良いそこは年月を感じさせる洋館風の店だった。古びた看板にはヌラム・エト・アウクターとかかかっている。

車から降りて入り口から中に入る。ドアベルはついておらず、か

なり時代を感じさせる扉がきしむ音が店内に響いた。

中は思ったよりもかなり広く天井も高い。緑のパターンの壁紙が貼ってあり、見る人の心を落ち着かせる内装にまとめられていた。

入ってから右手側の壁には様々な武器が陳列してあり、それぞれに値札が貼られている。

そこから5メートルほど反対側に移ってこんどは鎧やその下に着るギャンベゾン（鎧の下に着るクッション付きの服）や、ジャージ、パッド、クッションなど服に関するものが並べられていた。

（なるほど……ヌラム・エト・アウクター文字通り服と武器ね……。合理的だな……。）

「ミリア今空いてる？」

「はい、大丈夫ですよ。お姉ちゃん！ お客さん！」

レジに座っていた赤い髪の14歳ほどの女の子に声をかけて誰かを呼び出すレーティア。

2、3拍ほどおいてから店の奥からは11という返事が聞こえてきた。

現れたのは後ろ髪をバレッタで結い上げた20歳ほどの女性だった。

レジの女の子と姉妹である事をしめす赤い髪に緑色の目。シンプルな黒いエプロンを掛けた女性だった。

「はいはいいらっしやいませっと。レーティアじゃないですか、今日はどういったご用件で？」

「弟子ができたから彼の体のサイズ測って欲しくて」

「あれ、もう弟子をとったんですか？」

「うん。一目惚れ」

「へー。すごいですねえ」

この世界の修練者は全盛期を過ぎて、自分の実力にあつた階層に戻ろうとする中堅以上の修練者や、協会の要請にこたえ、教官として協会に務めてから弟子をとるのがほとんどだ。

たまにレーティアのような例外も存在するがおおよそはそうである。

まじまじとヨシアを見つめるミア女史。

特に後ろめたいこともないのでこのさいこちらも見つめ返す。

(うーむ。飄々とした雰囲気だけど元気のありそうな女性だ)

(体は……これまたきれいに鍛えてあること。)

特に背筋と腹筋をよほど鍛えたんでしょね、縦に伸びてる。

肩も僧帽筋から三角筋まできれいに形作ってるし綺麗な逆三角形に絞られてる。それでいてまだ発展の余地のある肉体……。

確かにこれは自分色に染めなくなる体ね……一目惚れつてのも頷けるわ。

んーでもなんか目が死んでるわねえ……それがなかったら食べちゃいたいくらいなんだけど……なんか気が沸かないわ)

想い人が自分以外の女性と見つめ合ってるのが気に入らなかつたのか、少しだけイラつきヨシアに分かる程度にだけ語気を強めて喋った。

「ヨシア、挨拶」

「あ、はい。弟子のヨシア・アンザスです。今日はじめてこの都市に来ました。よろしく願います」

「ああ、ご丁寧にどうも又ラム・エト・アウクターの服飾担当のミア・ファークです。よろしくヨシア君。で、レーティア。体のサイズ測るって言ってたけど作るモノはもう決めてあるの?」

「うん。何も効果をつけてない見習い期間用のギャンベゾンを着オーダーメイドで。あと、協会の測定にも提出するからデータのこ

ピーだけ頂戴。」

「はいはいかしこまりましたと。じゃー、ヨシア君いろいろ測るからついてきてねー」

そういつて鎧と服が並べてあるスペースの奥。そこでヨシアは頭のサイズ、首周り、身長、座高、肩幅、腕と足と胴の長さとお太さ、バスト、ウエスト、ヒップ、股下など体の隅から隅までデータを取られた。

その間自分以外が恋人に触れていることが気に食わなかったのかいつもより眼光が鋭くなりヨシアが変な気を起こしていないかじつと観察するレーティア。

仕事人としての作業なので淡々とデータを測っていくミア。

その間はこのデータを使って服を作るにはどういうふうにするかとだけ考えられていた。

レーティアの目付きが鋭くなったのを感知してやましいことなど無いとばかりにやたら堂々とするヨシアだった。

「はいじゃあ、これで終わりつと。ギャンベゾンはだいたい1週間後くらいかな。大口の依頼もないし、受け取りはどうする？」

「じゃあ、こつちが1週間後以降に取りに来る。その時に頼んでた武器とか触りに来るから」

「はい、毎度あり。代金はいつもどおり月末の引き落としに加算されるから」

カーボン用紙と重ねられてる領収書に書きこみを入れ、控えを切り取りデータのコピーと一緒にレーティアに渡すミア。

コクンとうなずいて了承の意図を見せるレーティア。

「じゃ、行く。ヨシア」

「はい。ミアさん今日はありがとうございました」

「いえいえ、どうぞご贖罪に」

そう言って手をひらひらさせ店の奥に消えていくミアだった。
レーティアの後に続いて店を出て車に乗り込む二人。

外は夕日として日光がだんだんと赤みがかるところだった。

無言で手を差し出してくるレーティア。頬が赤く見えるのは日光のせいだけでは無いだろう。

（恥ずかしいなら無理しなくてもいいのに……。これは男として今度から進んでやってあげた方がいいのかな）

それに手を重ねるヨシア。

トクントクンと静かな鼓動が伝わってくる。何回手をつないでも人肌を直に感じると安心する。

そう考えながら魔導炉の振動と唸りに身を任せるヨシアだった。

夜。月がでて星々がはつきりと光りをはなつ夜空の下。白い屋敷の二階の一室にヨシアはいた。すでに荷解きも夕食も取り終えたあと。

シーナとレーティアに勧められるままシャワーを浴びて自室に戻ったヨシア。

その内心では少しテンパっていた。

（やべー！ ちゃんとシャワー浴びたけど何すればいいのかわから

ん！すでに前世あわせて魔法使いどころか大賢者ですし、何すればいいんだっけ！？ キスとかくなんちゃら、どれをどういう順番でやれば……！？）

ノックが響く。ヨシアの部屋はレーティアの部屋を壁一枚挟んで並んであり直通の扉が付いている。音はレーティアの部屋からだった。

「はい」

（あ、やべっ……！）

内心とは関わらずに体だけ思考から切り離されたように反射的に返事をしてしまう。

いくらか逡巡したのだろうか。呼吸5拍ぶん時間を置いてから、扉が音もなく開く。

そこに立っていたのは。

全裸のレーティアだった。

「ぶっ！ フェツホ！ エツホ！」

想像以上の、あまりの事態にむせるヨシア。反射的に目をそらす。しかし、前世に比べて高スペックすぎる肉体はしっかりと見てしまった。

湯上りのしっとりとした髪はほどいて後ろに流してありいつもと違った印象を与える。

普段はブラに抑えつけられていた爆乳といっても差し支えないバスト。たとえ服の上からでも男であれば誰でも発情させるような魅力を放つその頂は綺麗なサクラ色に染まいたっており、透き通るような肌とのコントラストは素晴らしい絶妙さを持ち合わせていた。

正面から見て綺麗な丸を描きながらも体の前に突き出された形の

乳房は解放された今雄大に存在感を放っており、その先端はツンと上を向いていて堂々としている。

くびれた腰からヒップ、ふとももに通じるラインはどんな芸術家でも再現できないであろう女性らしさを誰よりも体現していた。

文字通りボンキュッポンを体現したかのような裸身。

男性の理想を型取り、そこに美の神が祝福を与えたのかのような美しさを放っている。

たとえ全世界から美女を集めてコンテストを開催したとしても悠々とトップを取ってしまいそんな極上の肉体だった。

(反応するな、俺！)

すぐに目を逸したとはいえ、男の理想とも言える肉体を見てしまったせいで急速に体の一点に血が集まるのを自覚する。

湯上りであることも加えても通常よりも3倍ほどは赤い顔をして上ずった声で喋り始めるレーティア。

「み！ 見られて恥ずかしいか、体をしてな……ううー！！」

喋ってる途中で恥ずかしくなったのか目にもつかない早さでしゃがみ、膝をかかえて体を隠すレーティア。

顔をぴったりと膝に埋めて顔も隠してしまう。

後ろから見てしまえばシミや傷一つない美しい背中とこの時はほどいて流れるままにしてある銀髪ときれいな桃型の臀部を見ることができたのだろうが、扉のところにつづくまる物体があるのでそれはできない。

「し、師匠！ とりあえずこれを！」

そういってシーツを取り、レーティアの元に駆け寄るヨシア。体

を隠すようにシーツをかけてやる。

「うっ、うっうー！」

隠れて見えない涙を流して口を開こうとも言葉に出来ないレーテ
イア。

グズグズと泣きながらシーツを使って器用に体を隠していく。
肩を抱いて立ち上がらせる。

「ほ、ほら、とりあえず座ろう、ね？」

頭からすっぽりとシーツをかぶって泣きながらズツ、ズツと鼻を
すすってヨシアの隣を歩くレーティア。

前世のニュースの一場面かよ、そう思いながらとりあえず事情聴
取をしようと決めたヨシアだった。

「なぜ、あんなことを？」

「グスツ……ツス……シ、シーナが」

「シーナさんが？」

「こっ、恋人と……グスツ……心許したものと一緒の部屋にいるな
ら、全裸でいるべきだって。見られて恥ずかしいことややましいこ
とがないならなおのことそうだって……ううー！」

（エルフは室内では全裸族かよ！）

あやしなから事情を聞き出せばそんな理由だった。

「いや、違う種族ですし、無理に真似しなくても……」
「と！ 年上として！ リードしなきゃって思ってる！ そしたら何すればいいのかわかんなくなってる！」
「ああ、はいはい！ ティアの頑張りはわかったから！ だから落ち着いて！ ね！？」

そう言つとシートをかぶつたままコクンと頷くレーティア。
未だに肩が震えてグズグズとしている。それを見てヨシアは

（俺と一緒にテンパツていたのか……）

何も変わらない。

二人とも恋人ができて舞い上がって。

勝手に暴走して、自滅しただけだ。

そう自覚すると、急に愛しさが胸の中から湧いてくる。

位置をかえて後ろから抱きしめるヨシア。

シート越しとはいえ、極上の肉体その柔らかさを知覚してしま
う。

鎌首をもたげ始めた劣情を抑え、恋人の鼓動に意識を集中させる。
いつもより早くなっているそれを聞いて意識で下半身を押さえつ
けながら口に出す。

「嬉しかったよ」

「……」

「俺もテンパツて何すればいいのかわかんなくて頭の中ぐちゃぐち
やになってたからわかるよ」

「……」

「無理しないでさ、ゆっくり行こうよ」

「……」

「……」

「不安だったの」

「？」

「一目惚れして、恋人になって、師弟としてずっと近くにいることになって、それを早く抱きしめて自分のモノにしなくちゃ、夢になっちゃうんじゃないかって……」

「……」

「怖かったの」

「俺は、ここにいるし、どこにも消えないよ。ずっとティアのそばにいる」

「約束」

「？」

「ずっと一緒にいるって約束してくれる？」

「うん」

「光神様に誓える？」

「うん、光神様に誓って」

「……安心した」

肩の震えが収まった。ヨシアと一枚分別け隔てていたシート。それを邪魔とばかりに自分からはぎ取りヨシアに抱きつくレーティア。直に触れて湯上りの肌の水気を感じる。乳房がヨシアの胸板に押し付けられ形を変える。それでも皮膚と脂肪の塊をはさみながらも心臓と心臓を近づけ合う。

「こっついて」

「？」

「こっついて、ぎゅって抱き続ければ緊張しない」

恋人の頭を撫でるヨシア。手が動いたたびにさらさらと髪が流れて

気持ちいい。

「無理してない？」

「してない」

どこかむくれて返事をするレーティア。

「予定通りに、する」

「ん」

頭を少しはなし、正面から見つめ合う。

どちらからともなく目を閉じて、再び距離を近づける。

距離がゼロになった時。月光が二人だけを照らしていた。

第三話（後書き）

2	2
0	0
1	1
1	1
/	/
1	1
1	1
0	0
5	4
一部追加	単位修正

第四話

3日後。レーティアの予定していた通り、二人は中央区にある修練者後援協会に来ていた。

白亜の塔のようなそこは文字通り修練者の迷宮攻略や生活などを支援することを目的として設立された組織だ。

修練者になるのであれば必ず所属しなければ迷宮に潜ることはできない。

これはこの都市を囲むように存在する5カ国が定めた不文律である。

広大な施設を敷地内に持っているため中央区のなかで一番の面積を誇る場所でもあった。

その協会に入ってから受付で担当官を呼び出した後、担当官とレーティアとヨシアの三人は測定のための施設へと向かっていった。

「フツ！」

「はい、これで終了です。お疲れ様でした。記録をまとめて見習いとして登録してくるので休憩しててください」

「はい」

スポーツジムのような場所で体力測定をひと通り終わったあと。ジャージ姿のヨシアはレーティアに尋ねた。

「師匠。これってなんの意味があるんですか？」

「見習いに自分がただの一般人であることを自覚させるため。」

修練者を目指す者は自己流で鍛えたり、協会に登録して見習いになる前から武術を習い準備を整えようとする人間が多数いる。

しかし、迷宮攻略に役立つかといわれればそうではない。

修練者の技術はプロミツサ・テラの中でしか受け継がれない。

そのため、外からやって来る修練者希望の人間が命を一番落としてやすいのだという。

昔から自分は他人よりも鍛えているから、武道を嗜んでいるから、そう思考する人間が特に死にやすい人間だ。

だから修練者のデータが集まる協会で修練者の平均スペックと比べ、自戒させることが見習いとなる前に義務づけられているのだという。

「へー。そうなんですか」

「通過儀礼と思って我慢して」

「はい、師匠」

そう会話しているうちに担当官が来て見習いに対しての通例どおり、Eランク　ただの一般人並　であったことを言い渡されヨシアの測定が終了した。

手渡されたばかりのギャンベゾンに袖を通していく。

鎧の下に着ることを想定して作られたそれは膝や肘などの関節部分をクッションで強化しながら体にぴったりとくっつく通気性の良い素材で作られている。

試着室の外にでて革鎧を受け取る。初心者向けとして昔から作ら

れてきたそれは初心者がまず鎧を着用することに慣れるということ
を主題においてあるかのよ様に簡素でありながらも実用性も十分に
高められていた。

続いて鉄靴、腰、すね、腕、肩としっかりとそれぞれの部位を身
に付けていく。

最後に兜をかぶって全身鏡の前に立つ。

「うん。おかしいところとかずれてるところは……無いな。調整し
なくても大丈夫か？」

「はい、しっかりと固定されてますし、動きづらいつつところは
……無いですね」

防具の調整を担当するキール・ファークにそう伝えた。

不備が無いが、ストレッチしながら全身をしっかりと確かめてい
くヨシア。

測定から5日後にヌラム・エト・アウクターを訪れたヨシアとレ
ーティアは注文していたギャンベゾンを受け取り、そのまま既製品
の鎧の試着に移っていた。

見習い用の革鎧の試着をしようと言った時に店の奥から出てきた
人物がミーアの兄、キールだった。

赤髪を短髪に切りそろえたキールとバレッタで髪を結い上げたミ
ーアがその動きを観察する。

二人とも先代である両親からそれぞれ鍛冶担当と服飾担当を認め
られた一流の腕前を持つ職人だった。

その二人が異常や気づいていないことがないと判断されてやっと
視線が止まる。

「よし、それじゃあ武器のほういつてみよつか。これ持つてついて
きて」

渡されたのは180センチ程の棒だった。赤檜でできたそれは見た目よりもずっと重い。

おそらく加工する際に切り出しただけでなく圧縮して作られたのだろう。思いつき振り回したり、ヨシアの全体重をかけて折ろうとしてもびくともしない強さを手を通して伝えてくる。

渡された棒を持って後についていく。扉を抜けて廊下抜けて案内されたのは中庭だった。

「適当でいいからちよつと振ってみたり突いてみたり動いてみて」

三人にジロジロと見られ少し居心地が悪くなるが我慢をする。

とりあえず言われた通りに振ってみる。

体を半身にして踏み込みながら振りかぶり、打ち下ろす。

その勢いを利用するように手を滑らし、なるべく端と端を持つよう意識し、両手を高速で縮めながら

「っせ！」

おもいつきり突いた。

左手は突き始めた瞬間に手を開き棒に添えて滑らせる。ぶれることなく虚空の一点だけをきれいに棒が貫いた。

そのまま振り回し、大剣を持つかのように大上段の位置まで持つてくる。

左足はしっかりと踏みしめて、右足を滑らすように出し

「ハアッ！」

力の限り叩き下ろした。

「うん、問題ないか。棒に振り回されていないかのチェックだった

からもついいぞ」

「あ、はい」

「もう2本も渡しておくから、見習い卒業したらまた来てくれ」

そう言っただけで店の中に消えるキール。

今まで黙っていたレーティアが口を開く。甘さを見せない師匠としての目付きだった。

「帰ってから棒の扱い方教えるから、迷宮はあと3日後に入る」

迷宮という言葉が出てきた時ズクンと心臓がはねた。

(この感覚は……)

体が、喜んでる。

この都市に来てもどこか実感の沸かなかった言葉。それが測定を終え武器と防具を整えた今、急に身近に感じられた。ドクンドクンと鼓動が高鳴る。

光神に祈りを捧げる場所。試練の地。地下に存在する魔物の棲家。そして

(願いを叶える奇跡のあるところ！)

目に光が宿る。何も映さない瞳が今ばかりはとキラキラ光る。この時ヨシアの中で熱が燃え広がった。

(近づいてみせる！ いや、至ってみせる！)

「じゃあ、帰るよ」

「はい！」

声に熱が漏れてしまう。普段はあまりそういう内心を外に出すことを良しとしていない。

だが、今は熱を抑える方法をヨシアは知らなかった。

そして約束の三日後。二人は装備を身につけ、中央区の迷宮までやってきた。

二人とも店で買った赤檜の棒を持っている。

あれから基本的な棒の扱い方を教えてもらい、あとは実戦で磨くように言い渡されたヨシア。

熱は収まった。

ただ、迷宮に挑むという覚悟だけが残っていた。

完全に修練者として戦闘態勢を整えたレーティアがいう。

「迷宮内では」

「師弟関係だけであること。師匠の判断に必ず従うこと」

「迷宮には」

「必ず師匠と二人で入ること。第三者からの誘いは断ること」

「ん。じゃ、行くよ」

「はい、師匠」

地下へと向かう階段へ二人は踏み出した。

「フッ！」

半透明な水色をしたスライムのゴルフボール大の核を狙う。

戦闘の基本は棒で学んでもらう

下から振り子のように勢いづけて狙った核をえぐり取るように弾く。

間合い、突く、振る、叩く、薙ぐ、弾く、これら全てを実戦で使える様になってから好きな武器を見つけて

中心の核に近づくに連れて手応えが重くなる。

まずは見習いが入ることを許される地下1階

手と棒の重さだけでは足りない。動かなくなった棒を鉄靴で蹴り上げる。

そこで、魔物を1000匹狩ること

一気に加速した棒は核をスライムから核をもぎ取った。

それが見習いから修練者になるための最初の試練。

ハアハアと荒い息遣いが聞こえる。

ついさつき46匹目の魔物を狩ったヨシアだった。

そこは地下だというのに昼間のように明るい通路だった。人が三人ならんで武器を振り回せるだけの空間でスライムを殺して、核を回収した。

スライムは核を体外に出されるか壊されてしまうと体を維持できなくなつて水をぶちまけたように広がって死ぬ魔物だ。

唯一消えない核は魔導具によって外に転送され魔石塚で魔石に変えられる。

「今、何時ですか……？」

常に一定の明るさを保っている迷宮の中では時間感覚をたやすく失ってしまう。

時計を見て、答えるレーティア。

「14時22分」

疲れすぎて眠たくなる意識を覚醒させる。

まだ潜れる、そう言い聞かせて棒を持ち直す。

両端が凶器である長物は地面につけてはならない。痺れそうになる腕でしっかりと持ちなおして構える。

「まだやる？」

レーティアは余力を残さないといけないとか、疲れる前に帰ろうとは一切言い出さなかった。

見習いに求められるのは2つだ。最弱の魔物であるスライムを一撃で殺しきれぬまで力をつけること、1000匹分の魔物との戦闘経験を積むこと。

スライムが修練者を殺害する手段はひとつしか無い。疲れた修練者が寝ているところに鼻と口を塞ぎ窒息死させる方法だ。

そんな間抜けはいないだろうと思ってしまう人間が死んでいく。スライムは魔導を使い、心を攻撃してこちらを弱らせてくるのだ。疲れた。休もう。ちょっと横になろう。極限状態にある人間の心を誘導して自分が殺すことのできる状態にしてから殺す。

単純だが魔導をつかって心への攻撃を防ぐことはできる。

だが、見習い期間中は魔導は一切使用禁止とされている。

理由は簡単だ。この程度を乗り越えられなければ先に進む実力が無いと判断され修練者になることができないからだ。

見習い期間中は華麗に敵を殺すのではなく自分の心と向き合い鍛え続けなければならない。

それだけが修練者になる長く険しい唯一の道だった。

あのあと劇的に効率が落ちてしまってもなんとか事前に決めていた50匹のノルマを達成した瞬間にヨシアは膝から崩れ落ちた。

限界以上にわたって心を弱めていたらしい。

伝聞系なのはその後意識のないヨシアをレーティアが屋敷まで運んでくれたとベッドの上で聞かされたからだ。

（情けない……というより当たり前だよな、俺はEランクの、ただの一般人なんだ）

前の世界のゲームでもあったなあと思いつく。

最初のレベルのうち1、2回の戦闘で街に戻り回復をしなければたやすくゲームオーバーになってしまうダンジョン攻略型のRPG。

そう考えながらぼーっとしているとレーティアが再び部屋に入ってきた。

手には何かのボトルと器具を持っている。

「全裸になって、うつぶせになって」

レーティアは師匠としての目でそう言った。

なら、何も疑うことはない。従うだけだ。

「はい、師匠」

「ここが痛いのは腕で棒を振り回しているから、棒は重さと長さが武器。扱うときは重心移動とあわせて体重をのせて」

「うガツ！ はい、師匠」

「きちんとした構えならかかとはほとんど薄皮1枚分つかせて地面に接してるだけのはず。足の使い方がなっていない。」

「イギツ！ はい、師匠」

「腰から移動を開始してないから、足が疲れる。体幹鍛えて」

「ツツア！ はい、師匠」

（その時その時に指摘するんじゃなくただ見つめていたのはこれをやる予定だったからか……）

激痛に変な声を上げながらも拷問に近いマッサージをつけるヨシア。

顔面が苦虫を噛んだようにシワだらけになっているのは痛みのせいだけではない。

（あーくそ。恥ずかしい……。）

なぜ、あの時あとしていれば、この時こうしていれば、そう思いつつも最適な動きを頭の中でシミュレートしながらレーティアの指摘を受けるヨシア。

まだ未熟すぎる自分が恥ずかしい。

それと同時に当たり前だという気持ちも存在していた。

（まだEランクの一般人だ。これから学んで活かしていけばいい。あー、くそ。恋人の前でいいかつこしてー）

劇やお伽話のようにはいかないな。

そう考えつつも激痛に耐えるヨシアだった。

穏やかに寝息を吐いている恋人の髪を撫でる。

黒いそれは自分の銀髪のような柔らかさではなく一本一本が芯の通ったような男性らしい髪だ。

（ノルマを満たせるとは思ってなかったな……）

窓の外は完全に日が落ちたことをしめす濃紺色の空だった。

マッサージは最初の方はかなり痛く最後の方は気持ちよくなるように変化させていった。

マッサージが終わると同時に寝返りをうって一言「寝ます」とだけいって糸が切れるかのように寝始めた自分の恋人。

通常、修練者見習いの初日ノルマの平均は27だ。

ほとんどの人間がそこで動けないほどに憔悴する。そうして自分の師匠に運ばれるのが見習いの誰もが通る道だ。

それを大きく上回るスコアをだしたのが師匠として、嬉しくもあり不安になった。

（頑固というか、負けず嫌いというか……。普段は落ち着いて大人っぽいのにこういう時だけ子供なんだから……。）

精神のアンバランスさ。それがノルマ達成の要因でもあり、無茶をする原因だった。
でも、と思う。

（頑張るのは応援してあげたい……。それがつ、妻としての役目だよね……。）

10日前の出来事を思い出して顔を赤くする。
お互いに初めてを捧げあって、そうして

（だ、駄目……。！ やっぱり恥ずかしい……。！）

そこで思考を打ち切る。

体をボフツとベッドに倒して。ヨシアと向き合う。

スースーと寝息を立てるヨシア。一瞬額から鼻のさきまでの高低や顎から首、鎖骨までのラインが色っぽく見えて鼓動が跳ね上がる。意識してしまつと顔の温度が急激に熱くなるのを自覚する。

男性の体はヨシアしか知らない。

見習いとはいつても全身まんべんなく鍛えられた筋肉や、女性の自分とは違う硬さをもったオスの体。

それに包まれることはどんなに気持ちのいいことだろうと想像してしまい、頭を振る。

「君が悪いんだぞ……。あんなことやこんなことまでさせて……。」「いたずら心が顔を出し、恋人の頬を引っ張ってみる。

「そーね。うにー」

うーうーと唸り変な顔になるヨシア。それを見てクスツと笑う。
この自慢の恋人なら、気がついたら隣にならんでいそいだ。
未来を思い、ちよっとだけむくれてしまふ。

「まだまだ師匠でいたいんだから、もうちよっとゆっくり歩いてきてもいいんじゃない?。」

猫なで声でからかうように言ってみる。

この師弟と恋人の奇妙な関係は自分から言い出したものだ。

すぐに終わらせてしまうのは少し寂しく感じてしまふし、同時に隣にいるヨシアを早く見たいという矛盾する気持ちもある。

「まあ、どうしても隣に並びたいって言うなら……頑張ってね?。」

そう笑って瞳を閉じた。

第四話（後書き）

2011/1105 一部追加

第五話

最初は壁に寄りかかろう。

次はそのまま座って。

最後に少し横になる程度はいいよな。

(クソツ！ うるさい！)

棒を体と一緒に回転させ勢いづける。

一回転したら棒を滑らせ握りを変えてそのままスイング。コツはわざと立つ位置をずらし一番遠心力のかかる場所をすねの高さにある核にあてること。

一瞬の抵抗と引き千切るような感覚。

スライムは核から見えない血管のようなものを広げていて、ある程度核の近くなら引っこ抜くようにそのまま吹き飛ばすことが可能だ。

じゃあ、今日はここらで切り上げよう。十匹も狩れば十分だろう？

(まだまだ！ まだ足りない！)

勢い余った棒をそのまま回転させ構えに持ってくる。

その振り回した力を逃さないように前に進み始める。

白い石床の上に水色のスライムがあれば見逃すことはない。

けれど連続して似たような風景しか見れないというのはそれだけで負担になる。

ふとした瞬間に自分がどこにいるのかわからなくなる。

地図の広大さの中のどこに自分がいるのか。果たして今まで通った道筋は地図に間違えずにかけたか？

そういつた漠然とした不安に飲み込まれそうになるたび師匠にすがりつきたくなる。

(だめだ！ 甘えるな！)

一度頭の中を空白にする。

大きく深呼吸。

まだたったの地下一階にしかない。まだ時間も余力も残してある。

だからまだ探索を続ける。

乱暴になりがちだった思考をリセットし、新たなスライムを探し始めるヨシア。

その後ろでレーティアは無言で見ていた。

(あと840)

都市の中は修練者にもみ剣帯を許されている。

夕方になると迷宮帰りの修練者が協会の近くに溢れかえる。

修練者専用のバスにのって帰る者や、協会で祈りを捧げた後に帰っていく者、そのまま店に入って行く者。

そうした中で駐車場を歩いている人影が2つあった。

ヨシアとレーティアだ。

ヨシアの表情は固く、生気がない。まだスライムの心理攻撃に慣れていないのだろう。傍目から見ても一人で歩くのがやっとといったところだ。

逆に言えば一人で歩けるまではなんとか慣れたということだ。
ヨシアは内心苦しいものがあつた。

見習いである自分の修行に師匠であるレーティアを付きあわせて
いることだ。

自分なんかに関わらなければもっと時間の価値を損ねることなく
行動できるのではないか？

無様な姿を見せて師匠を失望させているのではないか？

価値のある事を示すことができていると思つていいのか？

そんな負のループで思考がうまつていた。

「ヨシア」

「……あ、はい」

前を向いたままレーティアが話しかける。

反応がいつもより鈍い。そう判断したレーティアは決定していた
事をヨシアに告げた。

「明日から1週間休みね」

「つ……！、1週間も、ですか？」

「うん」

「え、それじゃあ、なにをすればいいんですか？」

「何も」

「え？」

「何もしない」

その言葉を聞いてショックを受けるヨシア。

なぜ？ という疑問で頭が埋め尽くされる。

自分は何か重大な失敗をおかしてしまったのかと急に不安になる。
足場がグラグラと揺れてまるで波打つ地面に立ってるようだ。

(俺は、何かがたりなかった？ 変な行動をした？ 師匠はどうして)

言葉を飲み込む。約束を思い返す。

『迷宮内では』

『師弟関係だけであること。師匠の判断に必ず従うこと』

すでに約束したことだった。師弟という関係を築いている間は無条件で師匠に従う。かつて自分で判断し、自分でそう納得したことなら、それに意を反するのは

(自分を裏切っちゃ駄目だ。それだけはしちゃいけない。それをしたら約束を反古にすることになる。あの時点で最善と判断した俺を裏切りたくない。それは、それだけはだめだ。)

思考に決着をつけて前を見る。

こちらを向かずただ了承の返事だけを待っている自分の師匠。

(そうだ。頼るべきはこの人だ。たとえどんなにみっともなくっても弟子である間はそれを恥ずかしいことと認識しちゃいけない。それを俺が判断することはおこがましいにもほどがある)

「はい、師匠」

いつものように返事ができたかわからない。それでも返事を聞けたからか歩き出すレーティア。

その背中を見て、ただついていこうと、そう思った。

額を狙ってくる棒。

一撃をこちらの棒を当てることで逸らし、その勢いを利用して反対側を動かす。

頭を狙ったそれはただ体を半身にするだけで避けられた。

(まだ、だ！)

縦から横へ。

手を使いテコの原理を利用して無理やり軌道を変化させる。

さすがに腹を薙ぐようにして出された一撃は避けられなかったのか、棒を真つ向からぶち当ててくる。

(なんで、手加減してこんなに重いんだよ！ つつ！)

攻撃したはずのこちらの手がしびれて硬着した瞬間に喉元に棒を突き出されて、稽古は終了した。

「ハアハア……ありがとうございます」

「ん」

疲れを見せずに返事をするレーティア。

白い屋敷の庭でジャージ姿の二人は稽古をしていた。

「次は5分後」

「はい」

呼吸が乱れたままだ。ひどく苦しい。
かれこれすでに10試合を終えた後だった。

(クソツ……また負けるまで短くなった)

内心はすでに苦いもので溢れかえりそうになっていた。
体の末端が鉛になったかのように重い。だんだんと感覚をなくし
思うように動けなくなってくる手。理想とは程遠い動きしかできな
い足腰。

頭の中の理想と現実の埋められない差。

自分の思考を再現できない体にイラツキが高まる。

(次は、次こそはまともに打ち合わないと)

師匠を失望させる。

(違う！今はただ背中を見て追いつこうとするだけでいい。そう
決めたはずだ！)

でも、

(やめる、この思考はまずい。みっともなくつてもなんだっていい
って自分で決めたはずだ！)

嫌われたくないだろう？

(うるさいうるさいうるさい。なんで、なんでだ！心に干渉して
くるのは迷宮内の魔物だけだ！)

自身が決めたはずの方向とは真逆の方向を向き始める思考回路。

心のブレーキが壊れてしまったのかのように自分の認めたくない部分が暴走する。

それから目を逸らしたい一心でかつての決意を思い出そうとするヨシア。

「時間」

「っ！ はい」

思考に気を取られていて呼吸を整えることを忘れていた。
うかつだった。

そうした思考のまま集中できるはずもなく。

一合打ち合っただけで試合を終わってしまった。

(クソッ！ どうすれば……一体どうすれば！)

思考は迷走したまま終わりが見えない。

結局そのまま稽古終了までレーティアの感情を見せない目を真正面から見る事が出来なかった。

鏡を見る。一気に10年老けこんでしまったかのような憔悴した自分の顔が写っている

(ひどい顔だ……。そして、なんて、情けない……。)

稽古は文字通り何もしなかった2日間を終えた後、どうしてもと

ヨシアが頼み込んだお願いだった。

それを聞いて特に拒否をすることもなく受け入れられ、ヨシアの望むまま稽古を付けられていた。形の上では、だが。

別に自分の師匠に勝とうという気持ちがあるわけではない。

ただ自分の理想と近づきたかっただけだ。

動きを最適化させ、まともな一撃を放つ。

言うだけならば簡単だが、実行は果てしなく難しい。

一朝一夕で動きが達人のようになれるわけではない。

どんな達人でも、武芸者でも始めたときからそう動けるわけではない。

誰しも下積や努力をしてはじめて到達できるのが理想の動きだ。

頭の中ではわかっている。

それでも今の自分のスペックが可能とするはずの動き。

それができないことでヨシアは焦っていた。

(何が、駄目なんだ……。)

シャワーを浴び終えて部屋着に着替えた今。やるべきことは何も残っていない。

本当に何もせず時間を過ごすしかあとはやることはない。

稽古以外で棒を触ることを禁止されているため、習熟訓練もできない。

必要なものは解ってる。実力だ。

それでも体は連日の疲労を溜め込み思うように動かない。

稽古をしていない今でもまだ手足は重たくなっただままだった。

(クソッ……。どうすれば、どうすれば。)

答えてくれるものは、いない。

1週間の最終日。午後の稽古を終えてからいつもと違うことがあった。

「着替えた後、待っていて」

そう言って自分の部屋に消えたレーティアは着替え終わったヨシアを連れて車に乗り込んだ。

(どこに行くんだろう……。)

シートにズブズブと沈み込んでいく錯覚を受けるのは限界まで疲れしているからだろう。

車がどこかの駐車場にたどり着いた。

車を止めて、外に出て歩き始めるレーティア。

それに遅れないよう気をつけながらついていく。

たどり着いたのは城壁だった。

この都市に入る時に使った場所ではない。城壁そのものに人が一人通れるくらいの扉がくつついている。

そこに鍵はかかっていなかったのか遠慮無く開けて中に入るレーティア。

続い扉をくぐる。

「階段？」

「登るよ」

そういつてどんどん登っていくレーティア。
四角い立方体の内側の一辺一辺に添いながら登っていく。
……結構な時間を費やしてやっと終わりまでたどり着いた二人。
目に飛び込んできたのは赤

扉を開けたそこは赤で染まっていた。
文字通り一面の赤。果てのない地平線に沈み込んでいる太陽を中
心に全てが赤色に染まっている。

この都市に来てからはじめて見る夕日だった。

よ。(………すげえ。………ああ、ちくしょう。なんでこんなに綺麗なんだよ。)

人が沈み込んでるのになんでそんなに綺麗なんだよ。(

「答え合わせ」

「っは？」

「だから、答え合わせの時間」

そう言って一歩前に踏み出してからくるとこちらを向くレーティア。

夕日を背景にして立つその姿はどこか絵画のような美しさを伴っていた。

現実感を伴わない幻想のような美しさ。

風に流された銀髪がキラキラと光を反射する。

自分の髪も揺れることではじめてあちらとこちらがつながっていることを知る。

「見習いは初めての試練を神聖視することが多い。

初めて自分の抱えた願望や理想を叶える場所にたどり着いて舞い

上がっているところに隙がうまれる。

「ここ最近、スライムの心理攻撃を常に受けてるような感覚はなかった？」

「!.....はい、ありました」

逆光によつて顔が見えない。

太陽を正面から見ないようにレーティアを見据える。

「自分の願望に少しでも近づぐために、辛い環境に身を置くことこそが選ばれた自分の使命だと強く思い込み始める。

1000という数字に辿り着くまでにある修練者たちの平均は2、3ヶ月かかる。どうしてかわかる？」

「いえ.....」

2、3ヶ月。毎日11〜17匹ほど狩れば辿り着ける数字だ。

毎日の日課として設定すれば丁度いいかもしれない。それだけ心理攻撃に耐える時間は短ければ短いほどいい。

あれの辛さは極限状態になるたび自分の醜い心と向き合わされることだ。

だれだつて自分の醜い部分とは距離を置きたい。

「ただ一流の修練者たちの平均到達期間は1ヶ月以内。

これが意味するのは前者が開き直った人たちで、後者が受け止めた者たちの差」

「1ヶ月!? それに開き直つたと受け止めた？」

「迷宮に憧れて試練を神聖視して捉えた人間の思考は次のようになる。自分の心の限界がくるからそろそろ探索をやめよう」

うなずける。

誰だつて自分の判断が的確であるうちに行動をしつかりと終わら

せたい。

自分の心を限界まですり減らして死ぬかもしれない可能性を高めたくは無いだろう。

「見習い期間中に師匠が必ずつく原因になったのはそれ。

よほど意識が高い人やどうしても叶えたい願いがある人は一人でもいけるかもしれないけど、逆に言えばそうじゃない人間は一人では突破できないかもしれないということ」

「それが2、3ヶ月かかる原因……？」

「そう。時間をかけてしまえば本当に非力な人間でも試練は突破できる。

でもそれじゃあ本当に見習いの目的である、実力を鍛えることと心を鍛えることができたのかわからない。

確かに迷宮に挑むだけで一般人には相当つらいことだけど……—
自分の心が危ないから≫
≫なんて理由で撤退をする人間がもっと深い階層に耐えられると思う
？」

「それは、無理、ですね……」

そのタイプは前に進めない。そろそろ自分の限界が近いから帰る。そんな思考では前に進めない。

「彼らに共通するのは開き直ったということ。

常に限界以上に挑まず、自分の心が弱いからという理由で帰ってくる。そうしてゆっくりと2、3ヶ月かける」

「それじゃ受け止めた方は？」

「毎回意識がなくなるまで挑んで、師匠におんぶされて帰ってくる
「ッ！」

「受け止めた人は単純、自分の心が弱いから自分の限界まで挑んで意識がなくなったら師匠に頼る。」

迷宮初日の君みたいに限界まで頑張る。心情として自分は心が弱いから師匠を頼らざるをえないでも、一だからどうした《・・・》

それは、と思う。

開き直り心の未熟さを理由に逃げる。

心が弱いことを認めて原動力にする。その差。

自分の頭の中がハッキリとしていき、胸の中のかえがストーンと落ちた気分だった。

(俺はどちらだった……？ 少しでも意識あるうちに帰ろうとしていなかったか？)

思い出す初日そうだったとしてもそのあと、限界まで鍛えようとしなかった。

師匠が隣にいるにも関わらずだ。

「そして君の場合は迷宮のスライムの心理攻撃に抵抗することになって見えない攻撃に過剰に反応しすぎた。

毎回意識を失っていけばそうじゃないかもしれないかもしれなかったんだろうけど、ある種錯覚に陥って開き直りかけた。」

「っ！」

「だからここで答え合わせ。正解は“弱いからがんばろう”」

自分の限界まで挑まなかったこと、それがヨシアの心理攻撃の錯覚を引き起こす原因となっていた。

そう思うと今までの幻聴ともいっべき心の声も途絶える。

「限界まで挑んでがんばって。そのあと私に頼って、ね？」

失望なんかしないよ、だって自慢の弟子だもの」

夕日が大地を染め上げた景色の中そういつて最後にレーティアはクスツと微笑んだ。

それを見て涙腺が緩みそうになる。だめだ止められそうにない。涙が零れ落ちる。

だから声には出さないようせいっぱい頑張っ

「ハイッ！ 師匠！」

そう答えた。

それから10日後ヨシアはスライムを1000匹倒しきった。

第六話

目を開いて飛び込んできたのは銀。

ほどけた髪がシーツの上に広がり銀色の水面を作っている。

キラキラと光り、たゆたうそれを見て思い出す。

(そうか……昨日丁度1000匹を倒し終えて、意識がなくなって運ばれたのか……)

答え合わせから10日。連日意識を失うまで狩りつづけ倒れるというサイクルを繰り返して昨日それに終止符をうった。

おそらく意識のない自分をベッドに寝かせて、体を拭いたり、マッサージをしてくれたのだろう。

筋肉痛にはなっているがだんだん慣れてきたというべきか。体に負担がかかりながらもどこか軽さを覚えてきた。

眼の前で寝ているレーティアの顔を見る。

師匠の時は怜悯ともいふべき鋭さを持つ顔は、その様子から想像できないような穏やかさを見せている。

新雪のような色の肌。傷やシミなどひとつもない上質なシルク生地のような輝きを放っている。

ほどこいて解放してある髪は、一本一本が細く繊細で芸術品と見紛うまでの美しさを持っている。

綺麗に整えられている眉に長いまつげ。

スツと通った鼻筋に水気を失わない艶やかな唇。

まぶたが閉じられ、静かさを見せる顔はどこか童女のような無垢さを見せていた。

(綺麗だな……)

純粹にそう思う。

男性としては理想の、恋人としては最上の顔をみせる自分の恋人、完璧とも言える女性と付き合っていることがどこか現実感がないように思えてくる。

対して自分の方はどうだろうか？

確かに前より見た目はいいし、体の基礎能力も段違いだ。

それでもこの恋人に釣り合っているかと言われると、すぐに返事はでない。

それでもあちらから求められ、それに応えることによって肌も重ねあわせた。

自分よりも遥かに優れた人物に価値を認められた嬉しさと、その高嶺の花を組み敷いた優越感とも言つべき感情が顔をのぞかせる。

自慢できる師匠を持った弟子としての喜び。

美女を自分の欲しいがままにできる状況に酔う男性の本能。

それらが同時に混ざり合って、自分の心が他人にさらけ出せるような純粹さを持ち合わせていないことに羞恥心を覚える。

(でも、それがどうした。師匠がすごいのもティアが超絶可愛いのも事実だし、男性としてはこれ以上とない幸福な立場に現実として俺はいる。

優越感も覚えるのも当たり前だ)

試練の最中やこの都市に来る前なら自分の心を恥じて自戒しようとしただろう。

そうして思考では決着をつけたつもりでも、内心どこか自制の効いた思考を免罪符として心の黒い部分がはびこっていただろうか？

(人として7つの大罪があるのは当然だし、三大欲求に勝てるような人間はいない。

いるとしたらそれは人間として心に欠陥があるということ。
なら、俺は正常だ。正常に汚いし、正常に誇らしい。)

極上とも言える恋人の前では劣情が湧くし、迷宮の中では師匠に追いつくための努力や向上心が芽生える。

良いところも悪いところも含めて自分であることを知覚したヨシアは、試練に打ち克つほどの心の強さを手に入れていた。

微かにレーティアのまぶたが揺れた気がする。

ほんの少しいたずら心が芽生えて、バカッパルの行動をとってみようという気になる。

「おはよ、ティア」

チュ、と額にキスをする。

「……ばれた？」

「なんとなくだけど、ね」

ゆつくりと目を開き、シーツを引っ張りあげ顔の半分を隠すレーティア。

上目遣いで見上げてくるその姿はいたずらが親にバレてしまった幼い子供を連想させる。

それを見て、素直に可愛いと感じる。

「なんとなく、寝た振りをしてみました」

「なんとなく、バカッパルっぽい行動をしてみました」

お互いに白状する。

どちらともなく少しだけ笑う。

そっやって起きた二人は挨拶する。

「おはよう、ヨシア」

「おはよう、ティア」

そうして二人の日常が始まる。

リビングでくつろぐ二人。朝食はライ麦パン、ベーコンエッグ、新鮮な野菜とレタスのサラダ、コーンポタージュだった。

シーナが朝食の前に朝に仕入れてきたパンと冷蔵庫で保存されていた食材を使って作られた食事は調理する人間の實力によって何倍も美味しく感じる事ができた。

（目玉焼きの下にすでに塩コショウがついてるってのは初めてだった。

どれが正しいのかしらんけど美味いからあれが正しい作り方なのかなー）

「ちょっと電話してくる」

「あ、はい」

そういつてリビングを出ていくレーティア。

（なんか予定組み込まれてるっぽいし、準備しておくか）

とりあえずスーツに着替えよう、そう思って自室に戻った。

……屋敷の中は静かだった。

厨房でシーナが食器を洗っていたりするかもしれないが二階まで音は届いてこないし、電話といっても話し声もかすかに誰かと話をしていることがわかるだけだ。

(そついや、修練者は光神と誓約を交わすとか言ってたな……。歴史の教科書にでも詳しい内容は書いてないかな?)

自室にある机。その上のついたてから教科書を取り出し最初から読み始める。

昔から言い伝えられているお伽話をそのまま載せた文を読む。

かつて世界は争いと流血で染まっていました。異なる種族、異なる思想、異なる国々が殺しあう混沌の時代でした。

そこに一人の女性が現れました。

彼女は光神様の祝福を受けた聖女であり魔導をもって光神様の威光を示します。

彼女は当時この大陸に存在していた6王朝を巡礼し、争いを辞めるよう王達を諫めました。

いくらかの時間を使ってから6王朝が奇跡を認め光神様を奉るようになりました。

光神様は人から想いを受け取りそれを奇跡として人に還してくださいましたのです。

それが魔導。魔石をエネルギーとして発動させる、神様から与えてもらった技術です。

唯一の例外は光神様の存在を広げる役割を持つ聖女様だけです。彼女だけが魔石なしで魔導を使い。争いをやめればこんなことができるようになること示した人間です。

ですが、その技術を与える代わりに光神様は一つの要求を人間に

しました。

迷宮を作り、試練を与える。それに打ち勝ったものが恩寵を受けよ。と。

その神託が王たちに告げられたあと、争いをやめた6王朝の真ん中の荒野。そこに迷宮が出来上がっていたのです。

迷宮の中に住む魔物の亡骸を日光に当てることによって初めて魔石を得ることができます。

王たちはお互い、争うことなく魔石を分け合うという誓いを立てました。

そして、どこかの国に所属する組織を迷宮付近に置くことをお互い禁止して、迷宮の周りに独立した都市をつくらせました。

これがプロミッサ・テラの成り立ちです。

プロミッサ・テラはどこかの国に加担することなく出来上がった魔石を平等に分配する重要な役割を担っていたのです。

争いが起きると迷宮が消滅し、魔石が二度と取れなくなると言われていたからです。

当然、試練に挑む人間が臆盾をしないように監視する役割が都市にはありました。

これが、修練者後援協会の元となった“組織”です。

ですが、この状況に不満を持った王がいました。

6王朝の中でもっとも大きい国であったキュピリアスです。国と人口が多いため魔石を砕き、小さなものにしないと国の需要が満たせなかったのです。

当然魔石は純度が高いか大きくないとできることが限られてしましますから、国の文明を保つためにももっと魔石が必要だったので

す。
当時、キュピリアスの王は不満を抱き、そして自分がプロミッサ・テラを支配するために軍を出兵させました。

ですが、神との誓いを破ったため呪いが降りかかります。

そう、奴隷の誕生です。

軍がプロミツサ・テラを囲み、制圧しようとした時にそれはおこりました。

プロミツサ・テラを運営する長が武器を捨てるように勧告すると、軍はそのまま武器を地面において動きを止めたのです！

キュピリアスに所属していた人間全てが奴隷になった瞬間でした。奴隷は人からの指示に逆らうことができず、1000年不老不死の呪いを受けて1000年たったら死ぬように“設定”されてしまったのです。

1000年間子どもを成すことも死ぬことも成長することも出来なくなつたのです。

これを見た王たちは震え上がりました。

誓いを破ることと争うことの恐ろしさを真に理解した瞬間でしょう。

この奴隷が誕生した瞬間から5つになってしまった王朝は軍を解体し自衛組織である騎士団に再編し、人と人の殺し合いや直接的な争いを固く法律で禁じました。

代わりに修練者になることを奨励したのは争いの元にならないようにするためでしょう。

誰だつて知らないうちに奴隷にされたくありませんからね。

ですが、この奴隷が誕生したあとにも奴隷が生まれるのはその人間がわざと人を害そうと企んだり、よっほどのひどい考えをもっているという証明になつてしまいました。

奴隷を別名キュピリアスと呼ぶのは争いの元は産んではいけないという自戒を忘れないようにしているからかもしれません。

こうして、王たちは争うことを恐れて、領土を増やそうとしたり、人口を増やそうという考えを捨てて、緻密な計算をもって魔石量から国力を決めるようになっていきました。

そうして迷宮が出来上がった年からはじまつた曆。

光歴を1900年数えてこの争いのない世界は光神様の恩寵と過

去の戒めから成り立っているのです。

読み終えて、教科書を閉じる。

血が流れなければいいのか、この世界にもオリンピックのような祭典も車やバイク等のレースも存在する。

光神の呪いがよっぽど恐ろしいこととして広まっているため、人々は大概が善良な考えと性格をしている。

たとえ包丁を持ちだして外に出ても「置き忘れたのかな？」で済むような治安を誇っているこの世界。

必要だから魔石を取るのではなく、魔石がとれたから生活に使う程度の考えにはなっている。

（あー。昔を思い出すなあ。

先輩集団に呼び出されてすわりんちかと思つたら“なんでそんな目をして俺達の方を見るのか”って問いただされたっけなー）

このシステムを守るために他の大陸には進出しようとしなくて内向的な進化を遂げている今世の人達。

警察や災害救助の役割は伝統ある騎士団がその役割を担っている。外敵も内敵も存在しないやさしい世界。

そんな世界がロシアの二度目の人生を送る舞台だった。

あのあと出かけるからと呼び出されて車で移動した場所は協会だった。

その広い敷地内に存在する教会。

そこで“祝福”をするからとだけ説明を受けてやってきたヨシアとレーティア。

大聖堂の真ん中を通る通路を歩きながら移動をしていた。

壁や天井までみびつしりと精緻な装飾がなされているのは前世の教会と似ている。

静謐だけが支配しているそこは儀礼用の一般時には解放されていない特別な場所だ。

「確認ですが見習いの試練は達成しましたね？」

ヨシアとレーティアに訪ねてくる担当官。

「はい」

「はい」

「分かりました。ではヨシアさん。この位置で膝をついて手を組んでください」

「はい」

言われた通りの格好になるヨシア。

目を閉じて祈りのポーズをとる。

「私の後続けて」

「はい」

咳払いをして喉の調整をする担当官。

「我、争いのために剣を取らず、祈りのために剣を取る事をここに誓う」

「我、争いのために剣を取らず、祈りのために剣を取る事をここに

誓う」

変化は呼吸1つおいてから現れた。

光の粒が集まり光球を成していく。

やがて光球はヨシアの体を包み込み、停滞する。

まぶたを通して突き刺してくる光を感じているとカツと体が熱を帯びた。

血液が沸騰し、筋肉が膨張し、神経が焼き切れる。

何か巨大な暴走するエネルギーをヨシアという体積の中に無理やり押し込んだかのようなのだ。

(ツツ！)

今にも叫んで無様に転がりたい衝動を抑えつける。

意識が極限まで痛みによって塗りつぶされる実感を得ながら必死に耐える。

……一瞬のことだったのか1時間のことだったのか。

時間感覚という言葉すら忘れそうになる意識を握りしめ、痛みが引いていくことだけがだんだんとわかってくる。

ジンジンと麻痺する体の掌握を再び開始して驚く。
体が軽い。

まるで重力から解放されたかのように重さを感じない。

ともすれば暴走してしまいかねない体を支配するのは鋭敏化された五感だ。

一気にブーストされた体というハードとそれをたやすく制御できる五感というOS。

今ならまるでできないことなどないかのような開放感。

今までが逆に体を何かに支配されていて、さっきそのコントロールを奪い返したと錯覚してしまいそうだった。

(これが……光神の祝福……。)

たしかにこの奇跡さえあれば古代の王達の説得など見戯にも等しい。

そんな感想を抱かせるほどまでに感覚が違った。

より鮮明に遠くまで見渡せるようになった視覚。

微かな物音すら逃しはしないだろう聴覚。

空気の匂いすらかきわけることが可能になった嗅覚。

自分の唾液すら分析できるようになった味覚。

そして、距離や空間でさえも鮮明に手に取るように理解できる触覚。

(これが……！　これが修練者……！)

新生したばかりの体に喜びが増す。

力を増したということとはそれだけ願いに近づいたということ。にやけそうになる顔を前よりずっと正確に支配する。

「はい、お疲れ様でした。これで祝福を終えてあなたはDランク修練者　になりました。見習い卒業おめでとございます」「ありがとうございます」

立ち上がり、担当官に礼を述べるヨシア。

内心では今までに得てきたもの全てに感謝を捧げてもいいくらいに舞い上がっている。

本人が抑えているため傍目からはわかりづらかったが。

「おめでとっ」

短く、けれどしっかりと祝福するレーティア。

生まれ直したばかりのような感覚を得ている今、師匠に認められたこと。

それが形になったようで、とても嬉しい。

今までの苦行はこのためだけにあった。

そう言われても納得してしまいそうだった。

そんないつになくはしゃいでいることを感じ取られたのかクスッと微笑んでレーティアは言った。

「じゃ、いい」

いつもより少しだけ軽い言い方だったのは今日が弟子の記念日だったからだろうか。

他人には絶対に見せない自分に向けられたやさしさを感じる。

だから、舞い上がっていることを表に出すのが恥ずかしくて、仏頂面で

「はい」

とだけ答えたのはしょうがない。

夜の帳が覆いかぶさり、星と月だけが空を埋め尽くした頃。
屋敷に戻ってきて夕食とシャワーを浴びても興奮は収まらなかった。

（待っててって何だろう？）

どこかづわつきながらも疑問に感じるヨシア。

(うん。今日は嬉しいことがあったし、しっかり奉仕してあげよう。
泣いても許してあげないようにしよう。そうしよう)

「ヨシア」

「なに？」

(つてうお！ びっくりした！ 俺の体ナイス！)

今世においては内心をめったに外に出さない外見はヨシアはあり
がたく思っていた。

内心はどんなことを考えていようと外に出して軽薄な感情にし
たくはないという持論があったからだ。

(やっぱり男は行動で示さないとな、うん)

レーティアは後ろ手に何かを持っているようだった。
すでに屋敷に戻ってきたからポニーテールの髪をほどいて流し
ている。

その髪が揺れて光を反射する。

目には優しい光が宿っている。

「目を閉じて」

言われた通りにする。

近づく気配。キスをするかと思うほど距離を詰めて、首の後に手
を回される。

同時に首に細長い何かがかかる感触。

「もういいよ」

「？ これは？」

シンプルな銀色の棒だった。

成人男性の片手にすっぽりと収まりそうなサイズのそれはちよつと長めのUSBメモリを思い出させた。

大体12センチほどの長さのその断面図は綺麗な楕円を描いていてチェーンでつながれていた。

「お守り。」

「お守り。何かに突きさそうという意志に応じて刃をだすお守り。」

「？」

「昔の修練者が身につける護身用具。おそろい」

そう言つて寝間着の首からチェーンを引っ張り出して見せるレイティア。

確かに同じ意匠のシンプルな銀棒だった。

「見習い卒業記念におそろい」

そう言つて満足そうに頷くレイティアだった。

(やべえ！ 超嬉しい！)

「ありがとう、ティア。お礼に……」

「？」

「奉仕してあげる」

「え？ きゃっ！ ちょ、ちよつと………！」

「あ、あん！　ンツ、つくふう、や、だか、らおちつんっ！」

「ア、アアツ！　だ、だめ……！！　いじくら、ない、で！　待って、あ、い、イイツ、いううー！」

「そ、そこは、そこだつ、けは……！！　い、いじわる、し、ない、でツ！　アツアツ！　アツ、アツアツあー！」

「イ、イイツん！　んんツ！　んツ、ツうー。だ、ダメツ、もうダメツ！　ツうああー！」

「アー！　アー！　アアアアアツツ！」

そうやってバカップル二人はベッドに沈んで、一晩中声と軋むベツドの音がしていましたとき。

第七話

手に持っている本のページをめくる。

魔導は技術であり、使用する際には魔石と使用者の意志が必要になる。

日常にも密接し私たちの生活を支えてくれる技術だからこそ、使用する者には正しい知識と心構えが必須である。

これが、魔導開発や使用に免許が必要になる理由だ。魔導具は二種類に分けられる。

1つは私たちの生活を豊かにしてくれる一般魔導具。

もう1つは大型の施設や修練者の持つ魔導具を代表する特殊魔導具。

修練者の持つ特殊魔導具には魔物を害することを目的とするモノがほとんどだ。

しかし、私たちの日常には必要のないものだ。だが、同時に魔石を供給してくれる修練者を支える技術として常に需要が存在する。

故に魔導を極めようとするものには、自分の目的をしっかりと持ち何をどのようにするのかといった明確なヴィジョンが求められる。

この本を読んで魔導の免許を取ろうとする際には自分を振り返り、自分のしたいことをハッキリと自覚したほうがいい。

それは勉強の際には自分自身を支えてくれる大事な友になるだろう。

魔導免許入門 まえがきとして ジョージ・エルメルヘス

一般人が魔導免許を取得しようと思っただら誰でも触れるという触れ込みで売ってあった本のまえがきだ。

エルメルヘスと言えば人間が魔導に触れた時から常に魔導研究の第一線を切り開き続けた名門の工房の名前だ。

おそらくは何十代目かの当主が分家の傑物が書いたと思われる指南書をパラパラとめくる。

本の前半は生活に関わる魔導具の構造と一般例、中盤には存在している免許とそれに対応して解禁される技術、最後の方には取りたい免許に応じての最適な本の紹介になっている。

アウトバーンをかつ飛ばし、魔導炉の唸りを思いつきり響かせるバスの中で時間つぶしに読んでいた本だった。

前世との大きな違いとして存在する魔導。

それ自体に興味が出たからなんとなく買ってみた本だった。

内容としては技術体系としての魔導とそれのもたらすメリットとデメリットに関するレポートのような一冊だった。

何も知らない一般人が読み、魔導について正しい姿を把握するためには確かにもってこいだった。

前世で例えると、世に出回っている製品や施設、その99%は魔導を使っているの何をどういう風に役立てているのか教えます。当然、中には知識のない人間が触れるとヤケド程度では済まない使われ方が存在しているので正しく魔導の正体を知りましょう。

あと、魔導に触れたいならどの魔導に触れたいのか自覚して資格を取りましょう。

と、いった感じだ。

なかなか面白い本だった。

別にこの世界は魔導がなければ存在できないという弱さがあるわけではない。

ただ、魔石がなければ魔導を使うことはできないのだ。

万が一魔石を取ることができなくなっても製品が動くようにデザインされているのはこの世界の常識だ。

魔導依存の製品などで社会が成り立っていた時もし光神が迷宮を閉じてしまう時が来るならば、それは社会の崩壊を意味してしまうからだ。

だから主な魔導の使われ方は【燃費上昇】【効率上昇】【長持ち】【自動修復】のようなアシストやサポートとして使われるのが多い。魔導の“魔”とはあやふやなもの、存在するが見えないもの、精神上のものとしてこの世界で定義されている。

ゆえに魔石を持ち、強い意志を持って【火を視界前方に噴射する】と直接物理現象を再現するのではなく、火炎放射器に魔石を組み込み【燃費上昇】【威力増大】と念じたほうがよっぽど効率がいいのだ。

魔石のエネルギーを持って、“魔”という概念を“導”く。故に魔導。

いくなれば社会の潤滑油だった。

より効率良い機構を作り、より良い結果を導き出し、エネルギーを効率よく扱う技術。

それが魔導だった。

魔導に依存しなくても機構として優れたシステムをデザインするために物理や科学技術は欠かせないものとなっている。

そんな技術の免許を取るのに必須ともいえる教本を手にしていた理由は暇つぶしだった。

ヨシアの所属する学校の修学旅行。

1〜6人の班を作り、5カ国が独立都市を選択して観光や取材、研究レポートを仕上げるといったもの。

少ない友人達が揃って観光名所として名高い国や、娯楽が充実している国、独自の魔導製品を作ることのできる有名な国にいくと言ってい

た。

それぞれが遊びに行ったり、まじめに取材、研究をしたいと言っていたので一人になったヨシア。

今世でできた友人はぱつとしない外見だったり、クラスの中でも昼行灯と呼ばれる類の明るくなく、暗くもない人間が多かった。

が、それぞれ譲れないものや偏執的に興味を持つもの、変な趣味をしているためこういうイベントでは譲れない一線を持ち合わせている変人たちでもあった。

そいつらに揃って

『プギヤーツ！！ ボッチでやんの！ ボッチ・カイザー（笑）』

と言われたので一人で班を作り友人が誰も選択していない場所を行先と設定したヨシアだった。

おみやげは金が余っていたら購買に売ってあるブレザーのカフスボタンでも買ってやろうと考えている。

あとはプロミッサ・テラの無料パンフレット。

気分が良ければあちらで買ったものや食べたもののレシートをあげてやってもいい。

学校の用意したバスの中でもボッチだったヨシア。

女子の多い班の騒ぎ声をBGMとして跳ねる座席に尻を攻撃されながら本を読んで時間を潰していた。

ヨシアの学校の修学旅行は雑で“その国へ行ってレポートを仕上げてください”というなんともなげやりに設定されている。

学校が団体客として列車の何車両かを予約したり、旅行会社に依頼してバスを学割で用意してもらうなどもあったが、個人で出発する時間をずらして現地に行くとか、学校の設定した滞在期間を伸ば

してギリギリに帰ってくるというのもありだ。

大抵は友人と行動するため、その手段をとるのは極少数だったが、基本この大陸に存在している5カ国とはいえ最大で行きに1週間もかかってしまう距離がある。

故に学校側が1ヶ月の修学旅行期間をとり、その間にそれぞれの望む国へ移動し、1ヶ月後の授業開始までならば時間をどう扱おうとも自由だった。

ぶつちやけ自国ですませ、ほとんどを休み扱い程度にしてもよい。そうする生徒はいるし、先輩方から続く伝統でもあった。

同時に教師陣を納得させるほどのレポートを仕上げないといけな
いが。

今頃要領のいいサボり魔は先輩方のレポートをミキサーにかけて構成を変えて自分の言葉でまとめるなどという作業に腐心しているの
だろう。

独立都市までアウトバーンで移動して2泊3日かかる予定だ。

うち一泊は途中の街で宿を取っており、あとの一泊はバスの中
とるという内容だ。

ボツチには辛い旅程だった。

(クソッ！ チラチラとうっせえな！ こっちみんな！)

無表情になり、無視していることをアピールする。

名前の知らない女子の集団の視線を浴びながらあと一日半耐える
のはなかなかに厳しい物があった。

プロミツサ・テラの城壁は城壁としての機能を望んで作られたわけでは有りません。

荒野の砂塵を含む風を遮るためと、独立都市として作られた当時6カ国のどの国からも等しく距離を置くという意味合いで巨大な城壁を築き上げたのです。

それが六芒星を描く城壁の意味なのです。

独立都市と言っても最初から人が住んでいて独立したわけではなく、各国のお年を召した政治的な配慮のできる人材や、心機一転光神様の象徴のお膝元で財を成そうという商人。魔導に魅入られた研究者、最後に神に祈りを捧げようという修練者達が集まって創り上げた都市なのです。

故に本当に独立したのはキュピリアス、奴隷誕生の

バスのなかに置いてあったプロミツサ・テラのパンフレットを読んでいく。

この都市に来た目的とは違うが暇つぶしとレポートを埋める文字たちにはなってくれるだろうととりあえずもらった。

こうして何かを読むという行動を外に示すことによって声をかけづらくする心理障壁を創り上げるのだ。

無言で何かを読んでも人間に世間話をしたから顔を上げてくれと言える人間は少ない。

一人ぼっちだから何かを読んでいるのではなく、一人で研究したいからここにいるのだと態度で示し続けたいといけなところが多い。

喉を長時間動かしていないせいで次に喋る時ハッキリと喋れるか不安になってきた。

(次は……今日の宿にチェックインする時か……)

バスの中で昼食は配膳された。

特にまずいわけでも取り立てて美味しいわけでもない料理を胃袋の中に押し込める作業が終わってから二時間ほど。

チェックインの16:30までのこり二時間とすこし。

都市運営の政庁まで行けば外部向けのパンフレット集めはできるだろうかと考えながら市営のバスを待つ。

(くそつたれめ。見慣れないブレザーがあるからというだけでこっちをジロジロ見てくるんじゃない！ 仕事に戻れ仕事に！)

前の生活を思い出す。

東京の中規模の会社に務めていた当時。

スーツを着ていれば昼間だろうと深夜だろうと誰もが無視してくれた心地よい環境。

たとえ満員電車のなかで体が接着しようとも居ないものとして扱う意識を持った人間の中での生活。

(久々にムカツいた。前世の東京ならそういう意識が常識だったんだよな。

今世の人たちはそういう殺伐さが足りてないから困る。)

そういう無機質な生活の中で電車で席を譲るとか、知り合いと仲良くするのが良かったのに。

この世界は善人しかいないのか！

いいことじゃねーかちくしょうめ！

そんな馬鹿な思考をしながら無表情の死んだ目でバスを待ってい

た。

ロシアの滞在期間は2週間を予定している。

到着してから一日目は遠回りして時間をつぶしながら、宿へと向かった。

大型のスーツケースはYシャツ3着に予備のスラックス、ネクタイ。

靴下3足に、下着3枚。魔導免許入門。筆記用具に手帳。

あとは財布とかハンカチの小物。

おみやげを神父に買うためにスーツケースは空けるだけ空けておいた。

ビジネスホテルのような壁際のベッドから降りて3歩も歩けば反対側の壁に辿り着く狭い空間にロシアはいた。

今世でもこういうホテルは需要がある。人気はないが。

国力を計算してから人口の調整を続けて繁栄してきたため、大都市のような場所でも広々とした空間を持つ建物が生まれる。

前世の猫の額ほどのスペースしか持つてない会社やホテルというのは珍しい。

そういった余り裕福な人間向けでないか、寝食の質にあまりこだわりを持たない人間向けとしてこのホテルは存在していた。

（あー。前世思い出すなー。初めて一人で受験のためにビジネスホテル手配して一人だけでそこに泊まったんだよなあ。それを思い出すわ。やっぱり学生には貧乏生活だよなー）

手帳を取り出して明日からの予定を確認する。

1日目：到着

2日目：特になし

3日目：北区の鍛冶屋ロレムさんとのアポ。取材。

4日目：協会見学

5日目：“

6日目：修練者レーティア・サント・ニエリアさんとのアポ。取材。

7日目：中央区工房サスペンディッセ・マウリスさんとのアポ。取材。

8日目：午前レポートを書く。午後観光。

9日目：“

10日目：“

11日目：“

12日目：“

13日目：予備時間（アポが流れたり、急用が先方に入った時のため）

14日目：“

15日目：バスに乗り帰る

16日目：“

17日目：家に到着予定。

レポート：修練者の歴史と特殊魔導具の進化

内容：1900年のうちに魔導を武器として扱う修練者の歴史と使われてきた特殊魔導具である武器の進化を見る。

魔石供給の未来とこれから必要になってくる技術の

変遷について。

（よし、不備は無い……。）

スケジュールを確認してそうひとりごちるヨシア。

すでに電話でそれぞれアポは取っておいたし、聞くべきことも決めてある。

特に失敗する要素や不安な点はない。

（よし、寝るか……。）

すでに制服はハンガーにかけて備え付けの寝間着に着替えている。下着とYシャツなどがランドリーサービスの袋に入っていることを確認してベッドにダイブした。

鍛冶屋ロレムさんの取材まとめ

- ・ 始まりの武器は今まで戦争に使われていたもの。
- ・ それらを持って迷宮に修練者たちは挑んだ。
- ・ 変化は地下20階に到達したとき。
- ・ 石室とも言うべき巨大な空間に巨大な魔物が出現し始めた。
- ・ それに伴い武器が大型化する。
- ・ 次の変化は地下50階。
- ・ 実体を持たない不定形な魔物の出現。
- ・ 武器に精神攻撃の魔導強化が使われ始める。
- ・ 武器によって力を振り回され死亡する人間が増えて

(く、る。と……。)

手帳の取材まとめスペースに先ほどまでに書いていた単語を箇条書きにしてまとめる。

取材のコツは相手の目を見て話しを聞き、重要となるキーワードを短く書き込み話全部を記憶するようにすること。

まとめるときに話を思い出しながら重要な点を逃さなければいい。

すでに4日目になってからまとめるというのは余りいただけない事実だったが、昨日は鍛冶の歴史についてかなり詳しい知識を誇っており、それに比例するような情熱をもつ人物だった。

ほとんど独演会のように情感たっぷりとまるで歴史の生き証人であるかのように熱烈に語りにつけてくれ、夕飯までごちそうになってしまった。

それでも9時まで帰してくれなかったというのだから取材者冥利につきるといふものだ。

協会の見学予定を遅らせるわけにはいかなかったので、協会のパンフレットを収集しながら喫茶店で前日のメモをまとめていた。

協会入り口脇に存在している喫茶店はエントランスからガラスの壁で区切られてあり、開放感を演出している。

入り口からガラス越しに顔を見られてしまうのがあまり好きではないが、コーヒーが美味しいのでキャラにする。

「なあ、どうしても駄目なのか？」

「くどい」

「君にも利点があるはずだ。もうソロではほとんど厳しいんだろう？」

「別に」

「別に隠す必要なんて無い。神に祈りを捧げるといふ行為に貴賤なんてありはしないのだから」

「……はあ」

「決心してくれたかい？」

不意にエントランスの方から話し声が聞こえると思ったらなにやら内容まで詳しく聞こえてくる。

他人の話を聞いてしまいどこかバツが悪くなるヨシア。
すこし眉を潜めて気にしないようにする。

（人に聞かれないように会話してくれよ……。コーヒーがまずくなったらどうしてくれるんだよ……。）

無表情だがすこしムスツとしてしまう。

話し声が止まったと思ったら視線を感じる。

ハッキリと視界に納めていないが手帳を見ながら確認すると薄ぼんやりと女性がこつちを見ている気がする。

女性と線を結びその真後ろとなる方を向いて確認するヨシア。
誰も居なかった。

（俺……？）

いや、この都市に知り合いはいない。アポをとった人たちですら電話越しで顔を見せていない。

（自意識過剰か……。）

そう納得してコーヒーをすするヨシア。なにも入れてないブラックは後味が透き通るようで水自体から美味しいのだと分かる。

挽き方によっては風味や香りを損なってしまうがこののコーヒー

はそんな失敗作ではない。

コーヒーに意識を向けて周囲と自分を隔てる。

だから、だろっ。

音が聞こえると思った瞬間には女性がこちらのすぐ近くまで来ていたのがわからなかったのは。

(！？ 近づく気配なんてわからなかったぞ！？)

生まれつきのポーカークフェイスに感謝しながらも内心驚愕するヨシア。

(なんだ？ 何が目的で……？)

「探した」

「ごめんなさい。とりあえず動かなければ見つけてくれると思って」

相手の真意がわからないので会話を適当に続けて相手に恩を売っておく。

「彼は……？」

女性と一緒にしてきた男性は少し困惑しながら女性に尋ねた。

女性と自分の間に入ってくる異物の確認をしようとする雰囲気がある。

こちらには一切聞いてないというように女性だけを見つめる男性。

「私の弟子」

「ッな！」

なんでもないことのように告げる女性と、やたら大きなリアクシ

ヨンで驚く男性。

目を見開きこちらを注目して真贋を確かめようとしてくる。なんとなくむかつくので女性側に味方をする。

但し、女性を見て他人同士の反応だと悟られてはいけないので女性はなるべく視界から外す。

(ええー。いいけどさ、とりあえず撃退するまでは付き合ってあげますよ……。)

「ご紹介にあずかりました。ヨシア・アンザスです。」

嘘をつく際には8割の真実に2割の嘘を混ぜるのが基本だ。

この場合の嘘は初対面の女性との関係。

ならそれ以外で嘘をつくべきではない。

嘘をついてないというふうにアピールするため学生証を取り出して中身を見せる。

この点 自己紹介 ばかりは嘘をついてないので相手の目を見て話す。

目を限界まで見開き学生証とヨシアの顔面を見比べる男性。

「じゃ、いこ。予定を押ししてる」

「はい、師匠」

かけられた言葉を理解した瞬間に顔を伏せて、出発する準備を始める。

相手が修練者だった場合、ここで嘘がバレてしまいかもしれない。不自然ではないように師匠 女性 に従い荷物をまとめて席をたつ。

「おごる」

「あ、ごちそうになります」

勝手に伝票をもってレジまで向かい始める女性。

ここもまた相手に合わせて本心を言う。

そうして、女性の後ろについていき女性の車の助手席になんてもないかのように座って男性を振り切るまで演技を続けていた。

六芒星の内側に接するようにつ作られた円形の幹線道路に入って追手がいないことを確認した瞬間会話を開始する。

「ありがとう」

「いえいえ。なんか困ってるように見えたので合わせました」

お互い前を向いたまま言葉を吐く。

「あとでコーヒー代払いますよ」

「助けてもらったからそのお礼にしておいて」

「あ、そういうことならご馳走になります」

相手がおごるといったならそれ相応に恩義を感じていたり対価を払いたがっている時だ。ここで断ったなら更に申し訳ないと感じて沈み込む場合がある。

そういうのはあまり好きではない。

(そういえばハッキリと見てなかったな……。)

女性の姿を見て驚いたりしては嘘がバレると思ったため、女性を意識的に視界から外すようにしていたヨシア。

声や後ろ姿から男性がしつこく誘う程度には見目麗しいとはあたりをつけている。

銀色のポニーテールは手入れされていて前世のモデルを思わせるほどの輝きを持っていた。

髪も後ろ姿も声も一級以上なら顔もそうなのだろう。

(さーて。どんな美人な、のか……。)

横を向いて確認した瞬間に固まった。

そこにいたのは女神だった。

シルクのようなシミひとつないきめ細やかでなめらかな輝きを放っている肌。

抜き身の刀を思わせる切れ長の目。

瞳はルビーのような赤で人を引きこむような魔力が存在した。

スツと通った鼻筋に、瑞々しい光を反射する唇。

前髪と眉は確認していた銀色だったが、改めて顔を見てしまうと呼吸ができなくなる。

女性を今まで視界に収めなかった奇跡に感謝した。

たぶん一目でも目に入れていたらああまで上手く事を運べなかっただろう。

「お礼したいから家のマンションに来て」

返事が、できない。

自分が想像する以上の美人を目のあたりにして身動きが取れない。まるで石化の呪いにかかってしまったかのようだ。

無言を肯定と捉えたのか幹線道路から降りて中央区に向かう車。運転席と助手席のあいだに存在するミラーがルビーの瞳を妖しく映し出していた。

(逃さない……！ このチャンスを絶対に逃さない……！)

キラキラと燃えるかのように輝いているそれは獲物を前にした狩人の瞳だった。

「じゃ、上がって」

「え………？」

「早く」

「あ、はい」

「それじゃあ、弟子になることに了承したことの書類にサインと拇印をおして」

「え………？」

「早く」

「あ、はい」

「それじゃあ、弟子にしてあげるかわりに私のお願いを叶えてもらいます。」

師弟関係と同時にこっ！ 恋人になってもらいます。

但し、この恋人関係はみだらに人前で明らかにしないこと！

そ、それがわかったなら！ わ、私にキスをし！ して……！」

「え……？」

「早く……！」

「あ、はい」

そうしてお互いファーストキスをささげて恋人関係になって、翌日にまた再会してヨシアが驚愕につつまれることになる。

レーティアは声をかけて返事を受け取った瞬間にヨシアだとわかり、ヨシアは翌日に再開してから恋人がすごい人物である事を知った。

これがお互い一目惚れし合った相思相愛のバカップルの馴れ初め。

卒業までの約一年を遠距離恋愛で過ごして、お互いのことをもっと深く知りあっていった。

いろいろと順序がおかしいカップルである。

ヨシアの友人にバレたりした時。

当手を振り返って言うには

「え、いや。一目惚れを跳躍して何されてもいっていか……。」

静かだし、美人だし、求められて嬉しかったし、拒否をする理由が当時見つからなかったし……。」

進路も決めてなかったしなあ。

たぶんあの時あってなくても翌日あってたら土下座してでも弟子になつてたと思う。

恋人関係はこっちから言い出すとしたら弟子卒業の瞬間に言おうかとその瞬間考えてた」

「一目惚れして恋人になろうと考えて、声を聞いた瞬間に弟子にしようとした。」

と。周りののろけていた。

第八話

「えー、では修練者に欠かせない特殊魔導具についての説明から入りたいと思います。」

「えー、ここでの特殊魔導具は施設や大型系の魔導炉のことではなく。修練者の必要とする魔導具というくりにしておきます。」

「ええー、ツウオツホン！ 主に修練者は武器や防具などに魔石を機構として組み込むかー。」

魔石を粉末状にしたものを練り込んだ材質などで作られた武器防具を使用しますッ、じゃなかった使用します。」

「えー、ソオシてえー、そういった魔導強化された武器などは使用者のお、ランクに応じた強さに設定されエー、使用者の意志に応じて何かしらの効果を発動っん！ しますっー」

「ええー！ ですのでえー、ここに集まった見習い卒業をした修練者さんたちはあー、こうして協会の規定により、修練者用の特殊魔導具免許を取ってっ！ んんッ！ もらいますー」

「えええー！ それまで迷宮に潜っても地下1階からはあー！ 下がれませんか！ 見習いを本当に卒業したいというならー！ きちんと試験に合格して免許を取ってくださいー！」

「（めーめーうるせえ、山羊かよ）」

「(ぷぷっ!-)」

「(ツツフ!-)」

「(そのうち手に持った教科書破いて食べ始めてもだれも突っ込みしなそう)」

「(くフツ!-)」

「(ツツ!-)」

「(えええー、私がこの教科書を選んだ理由はー、一番美味しいイからでーす)」

「クヒっ!(ちょっと、やめろ! 笑かすな!)」

「ブツっ!(ちょっと! やめて!-)」

「(やめられえないいー! 止まらないイー! 黒イインクはイカスミあじいいい!-)」

「(てめえ、やめろこら!! 腹筋が爆発する!-)」

「(やめてっば!-)」

「(めエエエエええええ!-)」

「ブホツツ!-)」

「ツウウン!-)」

「絶対あの人前世は山羊だ。まず言語に不自由なところが理由。あとめーめーうっさいし」

「お前の理由は解ったから笑かしにかかるな！」

「ほんとやめてよー！！ 耐えられなかったんだってば！」

「いや、この思いに共感して欲しくて……つい」

「最後ほとんど睨まれてたぜ！？ 一時間目から目エつけられたっばいんですけど!？」

「そんな理由で巻き添え食らったの、私!？」

「笑うということはほとんど同じ思いだったということ……よかったです」

「ただでさえ顔面の動きを見て笑うの我慢してたんだぞ!? それなのに最後の一線ぶっちぎりやがって！」

「ちょっと！ 思い出させないでよ！ 私沸点低いのよ!！」

「まあ、いいじゃん。仲良く慣れたんだし」

「隣に座ってた時からドキドキして同期の修練者とのコネ作るための自己紹介とか考えてたのに！！ 全部無駄になっちまったじゃねーか!?!?」

「私も清纯系でおしとやかで行こうと思ってたのにー!! メツキがはーがーれーたー!?!?」

「じゃあ、自己紹介しようぜ。俺はヨシア・アンザス。よく目が死んでるって言われる」

「なんでそんなにマイペースなんだよ!? んッ……ケイン・ライバック。この都市出身だ。ったく調子狂うな」

「……マナ・リーター。サンクト・リリウム女学院出身」

「自己紹介(笑)、おしとやか(笑)」

『何!?!? 喧嘩売ってんの!?!?』

「食堂に行つて飯くおうぜ飯。学校に購買しなくてさー。食堂とか憧れてたんだよ」

「いや、いいけどね……」

「なんでそんなにマイペースなの……?」

「食堂ならやっぱカレー系列だろ」

「個人の好みですうー！！ チャーハン舐めんなよ!？」

「女子がラーメン頼んでもいいじゃない！ ケチ付けないでよ!」

「敏感になり過ぎだぜ、二人とも。」

「お前の言動はいちいち堪忍袋の緒を刺激してくるんだよ……」

「なんでそんな自分以外の存在に喧嘩売りまくってるの……?」

「テンションの落差が激しいなー。もつとマイペースになれよ突っ込み体質は疲れの元だぜ?」

「お前の言動がいろいろと超越してるだけなんだよ……」

「なんか疲れる……なんで席が決まってるのよ……」

「失敬な。俺の言動は笑い求めるツツコミ待ちと真実でしか構成されてないぞ」

「見るこのつぶらな瞳を、一切光を反射しないせいで怖いだろう」

「ホントこええよ。笑いとかがお前の目からは想像も出来ねえよ……。なんでそんなに死んだ目とポーカーフェイスのくせに笑いを取ろうとするんだよ……」。

「ギャップが不意打ち過ぎるわ……」

「なんか過去にいじめられてたとかない……?」

「うちのクラスは騒々しいやつか変態しかいなくてな。

トイレから帰ってきて席に戻ろうと扉をくぐった瞬間拍手で出迎えて一発芸を強要するような奴らしかいなかった。

表情おもしろい動きかして笑ったら悪鬼スマイルとか言われたし」

「嫌すぎる！　どこの芸人養成学校だよ！？」

「女子高も大概だと思ってたけど何その魔窟」

「飯も食い終わったし、午後の授業までなんか話そうぜ。暇だ。ケインお前料理できる？　マナなんてまな板っぽい名前だし」

「目玉焼き程度しか作れねえよ」

「まな板っていうな！！　Bはありますうー！！」

「馬鹿野郎！　ケイン・ライバックなんて贅沢な名前してるのにその程度か！

もつと『俺は最強の修練者コックになるぜ！』くらいの気概を持ってよ！

あとマナ。寝言はD以上になってから言え」

「なんで俺の名前が料理人に関係あるんだよ！　普通に修練者目指してえよー！！」

『は？』

「いじりすぎたから謝ろうと思って。」

「へ？」

「カレーにあたったの？」

「初日から笑い合えるような関係を築こうと思ってたけど行き過ぎた気がして。」

だから、謝ろうと」

「……ああ、もうお前って何でそんな無限軌道なの？」

「行き当たりばったりというか気分屋すぎるでしょう……」

「自分に素直なのです。」

「あーもう、いいよそんな気にしなくて」

「精神攻撃には耐性つけてるし……」

「祝福終わった？」

「ん、おう」

「あたしまだ」

「祝福の時全裸にならないといけないのが辛かった」

「普通に服着たまんま」

「……つく！ 騙したのね！？ 乙女の純情を踏みにじったのね！？」

『乙女（笑）おしとやか（笑）』

「て、め、えらあああああああ！！」

『やったあああ（笑）』

「許さねえ！ 絶対に許さない！」

『きゃー』

「ファック！ ファアアアアック！！」

「おはようございます」

「おはよう」

「……おはよ」

「機嫌直せって。」

「心が広い人は巨乳が多いだろ？ そついつことなんだからさ」

「おい、声の調整から入ったぞ」

「ばねえな、奴は本気だ」

「ちよつと！　なんであんたせつかく作ってあげた弁当持って食堂行くのよ！？」

え、自慢したいから……？

そ、そんな調子の良い事行ってごまかしても駄目なんだからね！
どうせ、先輩が食堂で昼食取ってるから行ってるんでしょ！

じゃあ、一緒に食べようって……。

アンタ！　そ、それじゃあ私とア、アンタがまるで、こ、恋人に見えちゃうじゃない！

き、禁止よそんなこと！！

ま、まあどうしても、どうしてもっていうんなら！
人のいない中庭でならい、一緒に食べてあげる！

か、感謝しなさいよね！　ふ、ふん……バカ……。」

「おお……！！」

「これは……！！」

「ふん、どうよ？　この私の演技力は？」

「ツンデレよりクーデレのほうが好き」

「俺はボクっ娘」

「なんでそんなにいちゃもんつけるのよ……！！」

「ヤンデレも好き」

「亜人の耳もストライク」

「アンタ達の性癖なんてどうでもいいわよ！」

「この心理的負担を常に要求する掛け合いに今まで共通する点がある」

「なんと！」

「ケイン、アンター日でヨシア度が増したわね……」

「この教室のと真ん中で掛け合いをすることによって会話に参加してない他の修練者見習いを卒業したばかりの人間の耳目を集めることに意義が存在する！」

彼らは一応普通の声量で会話している俺たちの動向を常に把握しようとする俺たちが会話した瞬間に静かになる。

この現象と俺たちのコントを魅せつけることによってより声のかけやすい印象を与えることが目的だったのだー！！」

「な、なんだってー！？」

「……」

「んんー？ 何か不満そうな顔をしているマナ君発言を許可しよう」

「嘘でしょ」

『なぜバレたし』

「私達が喋り始めた瞬間に教室が静になるのって注目されてるみたいでなんか嫌なんだけど！」

「なあに、かえって免疫がつく」

「その現象に名前つけようぜ」

「……タキトウム、とか？」

「厨二っぽい、却下」

「ケインウィズアザーズオンステージ」

「頭いかれてんじゃないの？」

「3バカの会話」

『（ああ、それだ！）』

「バカは8割ぐらいヨシアが担ってる気がするんだけど」

「そういう死なばもろともみたいなのやめてよね」

「2割くらい自覚できてれば文句ないぜ！」

「お前って意外と！使う割にホント目が死んでるよな」

「ドブ川みたい。近寄らないで」

「よく言われるぜ！」

ケインお前って喫煙者？ヤニ臭いんだけど」

「親父がヘビースモーカーなんだよ！俺は未成年！見れば分かるだろうが！？」

「あたしも気になってた。近づかないで」

「ダブってそう」

「ダブってねーし！！ダブってるように見えるんじゃない！！少し周りより大人っぽくみえるだけですうー！！！」

「中庭で喫煙するのはよしたほうがいいよ（笑）」

「飯食い終わったあとにトイレが多かったのはそれが原因か……別にタバコくらい副流煙をこっちに流さなければいいよ」

「なんでそんな友達のちょいワル見逃してやるぜみたいな雰囲気になってるの！？」

「修練者で鍛えられた肺機能を活かしてタバコ吸うとか気が狂ってるわね……！！」

「カエルの子はカエル」

「吸いませぬー！タバコは嫌いなんですー！あと何気に俺の親父をデイスるんじゃねえよ！」

「別にデイスってはいないよ。ただ物理的な距離を置きたいなって」

「同意。体が資本ですしおすし」

「個人の趣味ぐらい別にいいだろ！？ 親父の趣味くらい見逃してやれよ！」

「修練者（笑）の自覚あんの？ アンタのお父さん」

「体を張った高等なギャグだな。心意気だけは見習いたい」

「お前らホント最低だな！？」

「ドングリの背比べ」

「目くそ鼻くそを笑う」

「女子が軽々しく目くそ鼻くそとか言ってるのは終わってるな
マナちゃんマジおしとやか（笑）」

「それを言ったら戦争だろっが……！！ ぶちころすぞヒューマン……
……！！」

「なに、亜人の血でも引いてるの？

あ、女バルバロイのアマゾネスハイブリッドエディションか^^」

「なにそれ最高！ ギャハハハハハハ！！」

「てめえらあああ……！！ 迷宮に潜る時は背後に気を付けるよ……
……！！」

「スライムに鼻くそとつてもらえば？」

「ヒィッー！ ヒィーッー！！ や、め、ろ！ 腹が、腹がああ！！
は、鼻くそとか……！！」

「クソツタレめええエー！！」

「今日で最後か……」

「これでついに……」

「めーめーから解放される……！！」

「特殊免許皆伝……！！」

「解禁される魔導具……！！」

「運命は今ここに始まる……！！」

「運命（笑）」

「夢見がちなお年ごろ（笑）」

「エターナルフォーススノウストーム（笑）」

「てめえっらああ！！ 修練者なんて職業ロマン溢れてるじゃない！！」

何が悪いのよ!？」

「いや、だって、ねえ？」

「ねえ？」

「なに、これだから困るみたいな雰囲気作ってんのよ！
スライムに頭ぶつけて死ね！」

「俺が死ぬときは腹上死と決めている」

「そういうのこそロマンだよな！」

「はいはい。脳内設定のお嫁さん（笑）」

「いつか、驚愕と共にその嘲笑は取り消されるぞ」

「俺だって亜人の普乳の可愛い嫁さんを人生設計では貰う予定だし？
逆にお前は異性に求める空想とか無いの？」

「逆ハーとかお前好きそうじゃん。女子高出身だし」

「え、そりゃあ修練者として大成して美貌も磨けあげた私は無垢な
弟子を理想の男性に仕立て上げる10カ年計画があるしー」

「シヨタコンかよ……」

「白馬の王子様と言わなかっただけ評価してやるよ」

「シヨタコンっていうな！！ ただ自分色に染め上げることが可能
なら年上の純粹キャラでも可！」

「今日最後だし、連絡先交換しようぜ。最初に断っておくと俺は師匠の家に居候してるから」

「また唐突だなヨシア……。まあいいけど、ほれ」

「ん、はい」

「最後の試験終わったあと午後どっかで飯食いに行こうぜ。食い放題とかドリンクバーがある所が良い」

「お、ヨシアにしてはまともな意見じゃん。

いいね、行こうぜ」

「まあ、別にいいけど」

「しかし、最初の頃からしっかりと成長してくれておいちゃん嬉しいよ」

「成長と言うより汚染っばい」

「なんか、割りとどうでも良くなった。色々と」

「さて、そろそろ試験前だし周りの視線が厳しくなってきたから黙るか」

「……」

「……」

「狙うは一発合格！」

「……」

「……」

「がんばるっな」

「おう」

「ん」

「ただいま帰りました師匠」

「合宿どうだった？」

「試験の方は思ったより簡単でした。
あと……」

「？」

「友達が二人出来ました」

「ん、よかったね」

「あと、連絡先としてこの住所と電話番号教えてきました」

「ん、わかった。後で名前を教えてね」

「はい、師匠」

「ヨシア」

「はい？」

「お帰りなさい」

「ただいま、ティア」

第九話

キールがカウンターの上にゴトンとロングソードを置く。

「これはうちに伝えられてある製法で作ったヌラム・エト・アウクターを代表する一品だ。

魔導内容としては【斬撃強化】【重心移動】【圧縮】【強靱】【精神攻撃】だ。

【斬撃強化】【精神攻撃】【強靱】はそのまんま修練者の武器にならほぼついてるオーソドックスなものだ。

言葉の通りの効果を付与する。

だがそんなもんはどうでもいい。注目すべき点は【重心移動】【圧縮】だ。

ウチに伝わる特殊なブレンドで削り上げた魔石粉末混入式ミスリル水銀がロングソードの中心核とも言うように柄の中から刃渡りの先ぎりぎりまで入っている。

これがどういう事だかわかるか？

中の水銀に意識を集中して【動け】と念じると中に満たされた水銀が動いて重心が手元から刃先まで自由に変えられるんだよ！

ホラ、見る！」

そう言っってロングソードの柄の真ん中あたりを指二本で挟んで持ち上げる。

明らかに見た目としてはおかしい一場面。

しかしロングソードは文字通り重心を掴まれているかのように地面に水平になりながら浮いている。

いや、説明通りということが証明されたのだろう。

「話に戻るぞ。」

をしたキールはヨシアに語りかけた。

「ウチの魅力……わかってくれたか……？」

「はい、ロマンあふれる武器ですね」

「わかってんなら……それでいい……」

特殊魔導具免許を無事取得することができたヨシアはレーティアと二人でヌラム・エト・アウクウターを訪問していた。

理由はヨシアの見習い卒業に伴って武器と防具を新しく作るため。レーティアがこの店のセールスポイントを聞いてから好きな武器をオーダーメイドしろと言ってから、キールに付き合わされ説明とどうか叫びを聞いていたヨシア。

（棒ともお別れか……）

屋敷に置いてある赤檜の棒を思い出す。

初めての試練が終わる際にはもはや体の延長として扱う感覚だった。

自由自在に動き回り、スライムの核を幾度となくふっ飛ばしてきた相棒を想う。

それとの別れはどこか寂しい物があった。

（長物からは変えたくないな……。けれど、刀や剣にも惹かれる……）

うーむと顔をしかめて思案する。

この世界は光神が現れる前は殺し合いの世界ともいえる血なまぐさい世界だった。

故に前世のほとんどの武器が揃っているといってもいい。日本刀らしきモノもきちんと存在している。

(棒も欲しい、剣も欲しいとなるとあれか……)

前世の娯楽作品の知識や武器の知識を引っ張り出す。

まえの世界では見た目しか重視してないような武器でもこの世界では実用的なモノに変える技術がある。

それに加えてここの技術。

それらを混ぜあわせ洗礼したさきには一つの明確なヴィジョンが
出来上がっていた。

「キールさん。こんな形の武器なんですが出来ますかね……?」

「今この場に不可能などという言葉は存在せん。言ってみろ」

「じゃあ」

キールと話している間レーティアと世間話をしていたミアアがこちらを向いた。

「終わった? なら次は防具ねー。ローブやギャンベゾン、布、革なら私も手出してるからバンバン言っちゃってねー」

思いついた武器を口頭で説明し終えて、書いてもらったイメージ図に納得し、次に行ったのはミアアとの相談だった。

カウンター越しに向かい合う。

防具はそれほどこだわりはない。必要最低限頼んだ武器を背負えるようなものであればいいと思ってるヨシア。

(いや、かなりの重量になるつつつたし軽くしないと駄目だな)

大まかに頭の中で戦闘スタイルを決めて防具を思い浮かべるヨシア。

体のあちこちと武器が触れ合うだろうし感覚を余り遮るものにはしたくない。

フルプレートアーマーなどは論外だ。

「武器は重たいものにしたので、こっちは軽装にします」

「ふむふむ、革鎧とか？ あと防具だけと見た目はただの服つてもできるよー」

「あ、じゃあフード付きのコートとズボンとその下に着るギャンベゾンだけでいいです。」

後は鉄か魔導で保護してある厚底のブーツと、武器を背負うためのコート外側につけるベルト。

魔導強化でチェインメイル以上の防御力が布製品にもあるんですよね？」

「うん。あるし、精神防御もバッチリ！ 細かい内容を聞くよ、ではどうぞ」

「コートの上に体にかけるベルトと武器を引っ掛ける機構はこんな

感じで
「

少し喋り疲れてイスに座り直す。

あのあと提携をしている靴職人の作品をいくつか見せてもらい、デザインと色を指定して今日の用事は終わった。

ミアとキールはお互いに受けた注文の情報を出しあい、何に注意して作るかなどといったすり合わせをしている。

こうして客の戦闘スタイルをコーディネートすることによって信頼と実績を積み重ねてきたのだらう。

(支払いはどうするんだらう。師匠がローンって言ってたけど…)

ふと、不安に駆られる。

調子に乗ってわがままを言い過ぎた。

いや、命に関わるものである以上妥協などしてはならない。

事前に“本心から好きなように”とレーティアから言い含められていた。

通常の師弟関係の目安は武器にかかった費用を弟子が師匠に返し終わるまでという暗黙の了解がこの都市にはあった。

ケイン、マナ達と会話している時にそう聞いた覚えがある。

ケイン曰く『武器防具揃えると申し訳ない気持ちに絶対なる』と言っていた。

思い出すと不安が一気にその質量を増す。

そこに明るい声が響いた。

ミアだ。

「レーティア。予想資金が産出できたわよー。武器8000万キム、防具5000万キムの1億3000万キム。少しだけ平均より安いわね」

「ん。その程度なら24ヶ月ローンで」

「あい。メンドイから月550万で月一の整備も含んであげる」

「ブツ!!」

吹き出した。

この世界では1円＝1キムだ。
1億3000万キム。

都内で土地付きの一戸建てを買えばそうなるかもしれない。
人生規模の買い物だった。

「ちよ、これで平均より安いとか……!?!」

「平均は1億4000万から1億5000万くらいよ?
自分の師匠にお金返し終わるときにはもう体の一部なんだしっ
ごく安いじゃない」

あ、協会の修練者支援制度を含んでこの値段だから。

一般人が買うと3倍くらい跳ね上がるわよ?

お得ねー」

「お前の戦闘スタイルが合理的でよかったじゃないか。シンプルだし強くなれるぞ？ たぶん」

「ヨシアならたぶんすぐ返済できる。心配いらない」

どこか初々しいリアクションをする子供を見るような視線がヨシアに刺さる。

うっ、と息をつまらせるヨシア。

思考を巡らせどのくらい時間がかかるか計算する。

（えーと、たしかDランクの修練者に毎月出される基本給は50万キム。

ノルマ上限超から倒した魔物に応じて確か手当が出てたはず……。毎月100万稼いだとしても衣食住にかかる費用も渡さなきゃいけない。

よっほど死に急がない普通のスピードなら3、4年か？

うわあ……。師弟関係を解消するまでにはちょうどいい年月になったけど

これはマジで申し訳なくなるわ……。

心折れて精神病院のお世話になるとか、怪我で修練者引退とかが日常茶飯事の中でこれか……)

頭の中で大雑把な試算を終えて現実に復活する。

キールとミアアはお互いの相談に戻っており、レーティアはただこちらをじっと見ている。

なんでもないことのように受け止めている瞳が今はただ見ていると辛くなる。

ヨシアは悪いことをしてしまったかのような後悔に包まれた。バツが悪くなり、口を開く。

「えーと、ゴメンナサイ……」

何に対して、謝っているのか、何を反省しているのかわからないまま口を開いたら反射的にそう言ってしまった。

レーティアはツカツカとこちらに歩み寄り、目の前に立つと少し怒ってるように眉を寄せてヨシアを叱った。

「コラ。ゴメンナサイじゃない。こういう時はありがとう、でしょ」

ピンツ、とデコピンをされる。

普通に痛い。

前世で悪ふざけでされたデコペンよりも痛い。

それでも、少しだけ心のなかの曇りは晴れてきた。

前をしっかりと見て視線を合わせ言われた通りにする。

「ありがとうございます。師匠。俺、がんばります」

「ん、応援してるよ」

そう微笑まれてしまうとドキッとして言葉が出なくなるのは、恋人になってからいつものことだった。

そうしてから1ヶ月更に技術を磨くため棒を使ってスライム狩りに勤しんでいるところに武器と防具が完成したとの知らせが届いた。ならば、することはひとつ。

上質な白い布に包まれたこれからの相棒達を見て生唾を飲み込む
これで、これでようやく

「ケインか？ 俺だ。ヨシアだ」

「マナか？ こちらはヨシアだが」

協会の施設に含まれている訓練場。

野外に存在し、フェンスで区切られたそこは修練者しか入る事を
許されていない。

一般人に体を鍛える場として解放するにはあまりにも物騒すぎる
からだ。

そんな危険な空間の中に一人の少年が立っていた。

ライトグレーのフード付きコートを着ているヨシアだ。

いつもの死んだ目は閉じられておりじっとしている姿は精緻な色
つきの彫刻のようである。

コートの上からは剣帯の役割をする多機能ベルトをつけており、
黒いそれは全体が灰色に包まれているなかでアクセントの役割を担
っている。

それに引つかかっているのは150センチほどの銀色の棒。

かつてヨシアの扱っていた赤櫛の棒よりはいくらか太さが増して
いる。

そこにだんだんと近づいてくる音源がひとつ。

足音だ。

柔らかい芝生を踏みながら音を鳴らしてきた人型はヨシアに近づ
くと口を開いた。

「きたぜ、ヨシア」

「ケインか」

目を見開きやってきた友の姿を視界に収める。

髪型はオールバック。

撫で付けられて整えられた金色のそれは稲穂が波打つような光を放っている。

額は広く、眉は太い。顔の造形はがっしりと彫刻のように高い高低差が現れていた。

瞳は優しい光を含んでいる。

顔の彫りの深い彼はまさに好青年とも言える独特の穏やかさを手に入れていた。

身長はおよそ180センチ。ヨシアより10センチほど背が高い。体つきは骨太でがっしりとした筋肉質の体だ。

身につけているのは金色の金属と明るい色の革で作られた鎧だ。肩、籠手、腰あて、すね当て、靴など金属のパーツがわざと強調されるような大きさを持つている。

体にきちんと合わせたサイズのものよりは1・2倍ほど大きく感じられる。

おそらく盾を持たない代わりに金属部分で攻撃を受けることを想定して作られたのであろう。

黄金色で勇猛なイメージを持つそれはケインの風格を増大させている。

剣帯に帯びているのは体の鎧部分と同じ色をした鞘に入った黒巻き柄の長剣。

幅も長さも一般的な西洋剣である。重さで切る形の剣だ。

ひと通りお互い友人の姿の観察を終える。

二人に向かつて少しハスキーな高いソプラノボイスが向けられる。

「あら、あたしが最後？」

悪びれもせずに堂々と現れたのは濃い紫と黒で作られたゴシックドレスを着た少女マナ・リーターである。

ぱつちりと開かれた目に、女性らしい小さな鼻にふっくらとした頬。

肌は病的なまでに白い。

唇はグロスの光を反射している。

身長は150センチと他の二人よりも低く、服装と相まって人形が動いているかのようなのだ。

濃い紫をメインとしてくるのフリルがあしらわれたカチューシャを肩までのつややかな黒髪に乗せている。変化をつけているのは左横に付けられた黒のフリルでできた薔薇とそこから垂れるリボン。

首はレースのついた黒い布で包まれ、首を一周するようにリボンが取り付けてあった。

首周りを大胆に空けて鎖骨のラインを見せるようになっており、そこからつながった肩の部分が膨らんでそのあとは細い二の腕にぴったりフィットするように絞られている。

つやつやとした黒革の手袋は手先からドレスのある二の腕まで覆い、輪郭だけが見て取ることが可能だ。

バスト隠した生地が胴体につながると手袋と同じ黒革がまるでコルセットのようにその細い胸を締め上げている。

その下に存在するのは黒い生地のロングスカート。同時に前の部分は切り取られてあり濃い紫出できたミニスカートに変わっているという複合的な構成。

切り取られた部分から見えるのは濃い紫のフリルのついた黒のオ

ーバーニーソックス。

最後にゴツゴツとした黒革のブーツを履いている。

そのドレスの上に引っかけられている剣帯には細い刺突剣が鞘に収まっていた。

その剣は針金細工のような複雑なナツクルガードと鍔が特徴だった。

「これで揃ったか……」

ライトグレーのコートを来たヨシアが他の二人を見回してそうつぶやく。

片方の眉を跳ね上げて質問するのはケイン。

「それで、完全武装で訓練場に集合して何始めるんだ？」

「とぼけるなよケイン……こんな状況になったらやることは一つだろ？」

自分が電話越しで相手に伝えた事を確認するような喋りを見せるケイン。

それにいくらか失望したようにヨシアは言葉を返した。

そこにマナのソプラノが重なる。

「あら、私もわかってたつもりだったけど……ケインには難しすぎたかしら……？」

「先手は俺がいただくぜ……？」

「あら、残念。じゃあ、二番手でいいわ」

「何の話だ……？」

未だに事情を飲み込めていないケインとお互いにやりとするヨシアとマナ。

ゆっくりと剣帯から銀色の棒を外し、それを一気に掲げ上げるヨシア！

息を吸い、叫ぶ！

「ヌラム・エト・アウクター謹製！ 【収納式長巻】！ 使用魔導は【斬撃強化D】 【重心移動】 【攻撃力強化D】 【精神攻撃D】 【変形機構】 【強靱】 【圧縮】 【自由自在】 だッ！

普段は棒、斬撃が必要になったら反り1.4センチの刃渡り120センチの刃が展開される仕組み！

打撃、斬撃、刺突！ これら全てを持ち合わせる最強の武器は他にない！

見よ！ 理想の武器とはコレのことをいうのだッ！！

防具は【魔導強化コート】！ 使用魔導は【精神防御D+】 【ダメージ軽減D+】 【衝撃吸収】 【速度上昇】 【頑丈】！ シンプル故に隙など存在しない！」

「黒薔薇連合作！ 【サルタテイオ・ローザルム】！ 【頑強】

【一点集中】 【刺突強化D+】 【精神攻撃D+】 【強靱】 【圧縮】！ その一突きは岩をも貫く！ 刺突故に一点にエネルギーを集約し解き放つは一筋の閃光！ その薔薇の一刺しは致命となる！

防具は【グラティア】！ 使っているのは【重量軽減】 【ステツプ】 【精神防御D-】 【ダメージ軽減D-】 【優雅】！

優雅に舞踏をし、その先に貫く！ まさしく蝶のように舞い、蜂のように刺す！」

「え、えーと。……獅子の群れ作成 【アウルム】！ 【攻撃強化D+】 【超圧縮】 【精神攻撃D+】 【頑丈】！
常識外のその重量に切れぬものなど存在しない！ 剣とはコレのことを言うのだッ！

防具は【レオニス】！ 【精神防御D】 【移動速度上昇】 【強靱】
【ダメージ軽減D】

その輝きは黄金の獅子！ 王者は常に全力を出す！」

「……ぶっちゃけ【優雅】ってなに？ ギャグ？」

喋り終えたのでいつも調子に戻るヨシア。

ポーカーフェイスの中ではハイテンションのふりをするだけでも辛いと考えてた。

「違うわよ！ 見なさいちゃんと！ 文字通り優雅でしょうが!？」

大声で反論するマナ。

ドレスの端を掴んで必死にひらひらさせる。

「お前は迷宮に何を求めてんの？」

結構まだ常識が残っているケインが聞く。

本当に不思議に思っている様子だ。

「何って……修練者人生歩むなら装備は華やかな方がいい、じゃない？」

「ああ！？ 武器が重いからシンプルに体を覆うものにしただけで
すうー！！」

あと長巻は最強だろ！ 棒と曲剣が組み合わさってるんだぞ！？」

「親父と兄貴が使った信頼性の高いものって言え！！」

ライバツク家はこの装備があつて初めて生き延びることができた
家系なんだよ！」

必死になつて弁解する二人。

最強の武器なんてものは個人個人によつて違う。

いつもどおりに喧嘩をし始める三人。

「長巻なんてマイナーは滅びろ！ 素直に信頼性のある枯れた技術
だけで武器は作られるべきだろ。」

わけの分からないものに命かけるとか頭いかれてんな」

「うっせえ黙れお下がり野郎。 骨董品にしがみついて溺死しろ。」

コルセットのドレスとかデザイン重視でも選ばねえよ。 数年後に
はボンレスハムだろどうせ」

「だまれポークビッツども！！ 今度魔石で【自慰のし過ぎで恥骨
が疲労骨折】する呪いをかけてやる！！」

もうここまで来ると何も無い。

バーリトウードの開始だ。

『あん！？ やるかこのやろう！？』

結局、ただ武器の自慢がしたいから招集をかけても、最終的には

いつも通りにバカをやってるだけだった。

第九話（後書き）

9〜13まで予定が入ってしまったのでその間の更新はないと思います。

あと、なんかよければ感想ください。

面白い、つまらないとか、3バカの会話がうざいとか師匠かわいいでもかまいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1890y/>

Pray 4 my sister !

2011年11月9日00時52分発行